

文部科学省 総合的な教師力向上のための調査研究事業

委託事業成果報告書

(平成28年度)

札幌市教育委員会

市立高校外部の専門人材活用推進委員会

目 次

I 調査研究事業の概要

- 1 調査研究の概要 1
- 2 市立高校外部の専門人材活用推進委員会の会議概要 3

II 調査研究ワーキングの活動報告

- 1 コンシェルジュ組織の在り方検討ワーキング 11
- 2 教員研修としてのIB公式ワークショップの運営検討ワーキング 17
- 3 IB公式ワークショップの成果発信検討ワーキング 26
- 4 特色ある取組の共有検討ワーキング 39
- 5 特別免許取得に向けた研修の在り方検討ワーキング 47

III 調査研究の成果と課題の分析 51

I 調査研究事業の概要

1 調査研究の概要

(1) 調査研究の目的

本調査研究においては、学校の教育力向上につながる外部の専門人材を活用できる持続的な仕組み構築、またそのノウハウや実績の共有・発信とそれに伴う教員への負担に対する配慮、特別免許状の取得を前提とした外部の専門人材に対する研修の在り方についての検討が必要であるという課題認識のもと、外部の専門人材を教師力向上につなげるための方策についての調査研究を行うことを目的とする。

(2) 調査研究の期間

平成28年5月16日から平成29年3月31日まで

(3) 調査研究の体制

調査研究の内容について協議するための組織として、「市立高校外部の専門人材活用推進委員会」を設置するとともに、当該委員会を運営するための事務局を教育委員会内に設けた。また、推進委員会の下に、課題を五つのテーマに分けてそれぞれ検討ワーキングを設け、外部の専門人材も交えて、各テーマについての具体的な検討を行うこととした。(推進委員一覧は、次頁参照)

(4) 調査研究の対象とする取組

- ・国際バカロレア機構（IBO）主催のIB公式ワークショップ（札幌開成中等教育学校）
- ・ラウンドテーブルの取組（札幌大通高校）
- ・アニマドレープロジェクトの取組（札幌開成中等教育学校・札幌大通高校）
- ・学社融合講座（札幌大通高校）
- ・特別免許取得に向けた研修（札幌開成中等教育学校）

(5) 調査研究の日程

事業項目	実 施 日 程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
・調査研究準備												
①推進委員会			第1回		第2回				第3回		第4回	
②各ワーキングの取組												
ア 組織												
イ ワークショップ 運営												
ウ ワークショップ 成果												
エ 取組発信												
オ 特免研修												
③分析・報告書 等作成												

市立高校外部の専門人材活用推進委員会 委員一覧

役 職	所属および職名	氏 名
委員長	教育委員会学校教育部教育課程担当課長	長谷川 正人
副委員長	札幌開成中等教育学校長	相沢 克明
委員	札幌市生涯学習センター事業課学習企画係 学習企画アドバイザー	岩本 隆
委員	小樽商科大学商学部一般教育等教授	岡部 善平
委員	公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会 青少年担当課長	松田 考
委員	札幌大通高等学校教諭	西野 功泰
委員	札幌開成中等教育学校教諭	黒井 憲
委員	札幌開成中等教育学校常勤講師 (特別免許保有者)	ディクセット・ラケッシ
委員	札幌新川高等学校教諭	原田 浩明
事務局	教育委員会学校教育部教育推進課 高等学校プロジェクト担当係長	小林 英輔
事務局	教育委員会学校教育部教育課程担当課 中等教育学校担当係長	広川 雅之
事務局	教育委員会学校教育部教育課程担当課 高等学校担当係長	幸丸 政貴

2 市立高校外部の専門人材活用推進委員会の会議概要

平成 28 年度 第 1 回市立高校外部の専門人材活用推進委員会

日 時	平成 28 年 6 月 10 日（金） 15:30～17:30
場 所	札幌開成中等教育学校 1 階会議室
出席者	（委 員）相沢副委員長、岩本委員、松田委員、西野委員、黒井委員 ディクセット委員、原田委員 （事務局）幸丸、広川

1. 開会

2. 教育委員会挨拶

3. 各委員自己紹介

4. 協議内容

（1）各委員からの自由意見

委員会の冒頭、平成 28 年度の調査研究の事業計画書等を見た上での各委員からの所感や今年度の調査研究に向けての抱負などについて、自由に述べてもらった。主な発言は次の通り。

- 先日道立高校の教員と交流する機会があったが、市立高校は道立高校と比べて外部人材とつながりやすい環境にあると感じた。そのとき、この調査研究事業はとても大事なものであると改めて認識したので、緊張感をもって今年度の取組に臨みたい。
- 最近経験したヨーロッパ視察を通じて感じることは、一般的に、ヨーロッパに比べて日本は、何でも学校教育で抱え込んでやっている印象を持った。とはいえ、現状を踏まえると、外部人材と上手くつながることで少しでも良い方向へ進もうという趣旨の事業だと思うので、外部人材の立場からこの事業に関わりたい。外部人材側から見ると学校は敷居が高いとよく言われるが、私から見るとそれはお互い様で、お互いの出入口は開かれているのに、ドアを押せばいいのか引けばいいのかで混乱しているようなものである。
- 最初の赴任校では、単に学校を外に開いただけでは誰もつながってくれないということを感じた。今では、外部とつながることで楽しくなるという思いでやっている。
- 高大連携事業を担当したことがあり、今回参加してみた。高大連携も広い意味では外部の専門人材とつながることだと考えたが、そのように捉えてよいか。（事務局→良い）
- 平成 18 年から平成 27 年までは外部人材の立場だった。今年度からは内部の立場になった。両方の立場を経験した者として関わりたい。例えば、外部人材と内部の

教員とでは、生徒が教員を見る目も違っているように感じている。外部人材に対するときの方が、少しはリラックスできているようだ。

(2) 調査研究の方針について

平成 28 年度の調査研究事業では、今回を含めて 4 回の推進委員会を予定するとともに、今後、テーマに応じて次の五つの検討ワーキングを設置して、具体的な調査研究を行うことについて事務局から提案があり、承認された。

○ 五つの検討ワーキングのテーマ

- ア. コンシェルジュ組織の在り方検討ワーキング
- イ. 教員研修としての IB 公式ワークショップの運営検討ワーキング
- ウ. 国際バカロレア (IB) 公式ワークショップの成果発信検討ワーキング
- エ. 特色ある取組の共有検討ワーキング
- オ. 特別免許取得に向けた研修の在り方検討ワーキング

また、外部の専門人材と連携した取組のうち、調査研究の対象とする取組を次の通り抽出した。

○ 調査研究の対象とする取組

- ア. IB 公式ワークショップ (平成 28 年 7 月実施)
- イ. アニマドーレプロジェクトの取組 (平成 28 年 5 月～12 月実施)
- ウ. 大通高校ラウンドテーブルの取組 (平成 28 年 8 月実施)
- エ. 大通高校と札幌市生涯学習センターが連携して実施する学社融合講座の取組 (平成 28 年 12 月～1 月実施)
- オ. 札幌開成中等教育学校における特別免許取得に向けた研修 (平成 28 年 10 月～平成 29 年 3 月)

(3) コンシェルジュ組織の在り方に関する協議

今後の検討ワーキングでの調査研究に向けて、特にコンシェルジュ組織の在り方について、各委員の意見を募るなどの協議を行った。そのうちの主な意見は次の通り。

- コンシェルジュに対する捉えが受け取る人によって異なっているようなので、コンシェルジュ組織の活動範囲や役割をあらかじめ明確にしておく必要があるのではないか。特に最初のうちは「人材バンク」ではなく「実績バンク」であることを重視すべきではないか。
- 外部人材を活用した特色ある教育プログラムの実施に関するノウハウが学校内で上手く引き継がれないことが多い。この部分をコンシェルジュ組織が担い、ノウハウを蓄積することで、新たに担当する教員の「困り」にすぐに対応することができ、ひいては教員の負担減や特色あるプログラムの普及・拡大につながるのではないか。
- 特色あるプログラムを広めていくためには「知ってもらう」ことが必要であるが、実際にプログラムを動かしている教員はそこまで手が回らないというのが昨年度の調査研究から明らかになったこと。この部分をコンシェルジュ組織が担い、パイオニアの役割を担う教員から情報やノウハウを受け取り、一般化して発信する役割が求められるのではないか。

5. 閉会

平成 28 年度 第 2 回市立高校外部の専門人材活用推進委員会

日 時	平成 28 年 8 月 25 日 (木) 10:00~12:00
場 所	札幌開成中等教育学校 1 階会議室
出席者	(委 員) 岩本委員、松田委員、西野委員、黒井委員、原田委員 (事務局) 幸丸、小林、広川

1. 開会

2. 教育委員会挨拶

3. 協議内容

(1) これまでの調査研究の報告

7 月 26 日 (火) ~ 29 日 (金) に実施した IB 公式ワークショップの運営、8 月 1 日 (月) ~ 2 日 (火) に実施した大通高校ラウンドテーブルの取組状況、そして、アニマドーレプロジェクトにおける商品開発 (7 月 27 日)、農業体験・調理体験 (7 月 30 日~31 日)、販売体験 (8 月 2 日)、広報・PR 体験 (8 月 3 日) の様子について、それぞれ報告を行った。

○ 報告の概要

ア. IB 公式ワークショップ

教員研修としての IB 公式ワークショップは、国際バカロレア機構 (IBO) からワークショップリーダーとセミナー講師を招いて 4 日間の日程で行った。ワークショップには 2 名の外部支援員が運営に関わり、受講者がワークショップに専念できる環境を整えた。今後は、受講者アンケートの結果を整理して IB 公式ワークショップ成果発信検討ワーキングで検討してもらうとともに、引き続き外部支援者の協力を得て、次年度以降の開催に向けて運営マニュアルの作成に取り掛かることとする。

イ. 大通高校ラウンドテーブルの取組

3 名の外部講師と様々な経歴を持つ多くの外部支援員の参加を得て 2 日間日程での研修会を実施。大通高校の教員同士がお互いの課題意識や外部協力者との連携に関する情報の交換、大通高校の生徒の抱える多様な問題について、お互いの話をじっくりと聞き合い熟議を重ねることで、教員相互が学び合い省察を深める機会となった。

このラウンドテーブルに参加する教員を市立高校全体に広げることができれば、市立高校各校の特色ある取組や課題を共有するとともに、市立高校共通の学校設定科目開設や情報発信の取組につなげていく有効なツールになるのではないかの報告があった。

ウ. アニマドーレプロジェクトにおける農業体験と販売体験

アニマドーレプロジェクトは、札幌大通高校と札幌開成中等教育学校が共同で企画する、生産者と生活者をつなぐ農業教育体験プログラムで、平成 27 年度の

調査研究成果を踏まえ、今年度から、それぞれの学校において単位認定できる学校設定科目となった。平成 28 年度の受講者は札幌大通高校生 12 名、札幌開成中等教育学校生 15 名の合計 27 名。これらの生徒が、農業体験、販売体験、商品開発体験、広報・PR 体験の四つの部門に分かれて取組を行い、12 月に成果発表会を行う予定。

(2) コンシェルジュ組織の在り方について

コンシェルジュ組織の在り方検討ワーキングから、これまでの検討状況を報告するとともに、今後の検討に向けて、各委員から意見を募った。そのうちの主な意見は次の通り。

- 外部人材との連携では、お互いが win-win の関係となるように意識する必要がある。途中までは順調に話が進んでいたのに、あるときから話が噛み合わなくなることがある。コンシェルジュ組織の外部人材が教員に寄り添う形で同席してくれるとありがたい。
- 時間を割いてボランティアでコンシェルジュ組織に携わってもらうためには、それなりの動機付けが必要。例えば、市立高校を卒業した大学生などであれば協力を得やすいのではないかと。学校の側も受け入れやすい。
- コンシェルジュ組織の法人化についてはメリットとデメリットの両方があるので、今年度末までかけてしっかり論点を整理すべき。
- 例えば札幌大通高校では、特色あるプロジェクトに参加した生徒が卒業後も関わり続けたいと申し出るケースもあり、各市立高校に照会すれば、それなりの希望者はいるのではないかと。但し、こうした取組に積極的な学生ほど他の活動にも参画する傾向にあるので、市立高校の取組に関わってくれるかどうかリサーチが必要である。なお、学生がボランティアとして関わる以上、自己有用感を感じることができなければ長続きはしないと思われる。

(3) 特色ある取組の情報発信について

今回報告された三つの取組とその成果について、この会議に参加している各委員は日頃から興味・関心をもって取組を見ているし、詳しい説明も受けているので、その有効性を理解することができるが、他の市立高校の教員も含めてほとんどの人は、取組そのものを良く知らない状況にあり、こうした人たちに目を向けてもらうためには、単に情報発信をするだけではなく、その仕方についても工夫が必要であるとの意見が出された。

また、情報発信を工夫する場合、例えば、短い時間で端的に概要を伝える動画の活用や誰でも情報を発信できるような Web サイトの活用などが考えられるが、現在の札幌市の公式ホームページでは、セキュリティポリシー上の制約からこうした発信はできないことになっており、外部サーバー等の活用も含めて課題を整理する必要がある。

4. 閉会

平成 28 年度 第 3 回市立高校外部の専門人材活用推進委員会

日 時	平成 28 年 12 月 14 日（水） 10:00～12:00
場 所	札幌開成中等教育学校 1 階会議室
出席者	（委 員）相沢副委員長、岡部委員、岩本委員、松田委員、西野委員、黒井委員 原田委員 （事務局）幸丸、小林、広川

1. 開会

2. 教育委員会挨拶

3. 協議内容

（1）これまでの調査研究の報告

五つある各検討ワーキングの状況について、それぞれ報告を行った。特に IB 公式ワークショップ成果の発信検討ワーキングにおいて作成中の『教室で使えるグループワーク』という冊子については、素案を提示して各委員から意見を募った。また、アニマドレープロジェクトにおける発表会（平成 28 年 12 月 18 日）の発表内容についての予告を行った。

（2）市立高校コンシェルジュ体制について

コンシェルジュ組織の在り方検討ワーキングから、これまでの検討状況を報告するとともに、今後の検討に向けて、コンシェルジュによる情報発信の観点から各委員から意見を募った。そのうちの主な意見は次の通り。

- 例えば、「札幌人図鑑」を主宰している福津氏のような方に依頼し、市立高校 8 校を定期的に巡回し取材していただき、発信したらよいのではないかと。校内での教員同士の共有を進めるためにも是非行ってほしい取組だが、その際ネックとなるのが、公式ホームページからはフィルタリングソフトのため動画が見られない点である。色々課題があるのだろうが、是非とも改善に向けて検討してほしい。
- 動画さえ見られるようになれば、校務支援システムのメール機能で周知することは可能。このとき、自分たちの取組が紹介されるとなれば、閲覧する人も増えるはずであり、そのついでに他校の取組なども見てもらえれば、市立高校全体での共有につながるのではないかと。

（3）外部人材を活用した取組の成果発信について

特色ある取組の共有検討ワーキングから報告のあった、外部人材を活用した三つの取組について協議した。それぞれの取組に対する主な意見は次の通り。

ア. アニマドレープロジェクト

- コープさっぽろが発行する『ちょこっと』という冊子の2月号に、アニマドーレプロジェクトの取組が紹介される予定。通常であれば15万円から20万円かかる掲載スペースが無料で提供されることとなった。アニマドーレプロジェクトに関わっている人たちは、各種コンテストの受賞者などその道のプロであり、今はわからなくても、将来、生徒たちもその凄さが分かる日が来るものと思われる。

イ. 大通高校ラウンドテーブル

- ラウンドテーブルは特色ある取組というよりは、市立高校の教員が取組を共有し合う場として捉えるのが良いのではないかと。連絡協議会や推進委員会など既存の会議は、どうしても伝達のための会議になっており、お互いに自由な雰囲気でも悩みを打ち明けあったりじっくり時間をかけて議論し合ったりするなどの取組にはならない。例えば、ラウンドテーブルの分科会に市立高校教育改革の主要改革をテーマとして設定し、若手の教員などがアイデアを出し合うのも有効ではないか。
- 現在のラウンドテーブルは札幌大通高校の研修として企画・運営しているが、正直つらい部分もある。高校教育改革の一貫として、例えば市立高校コンシェルジュが関わり、市立高校全体の取組になるのは良いことであり、札幌大通高校も望んでいるところではないか。

ウ. 札幌市生涯学習センターと札幌大通高校との学社融合講座

- 現在、札幌大通高校との協定により行われている講座だが、他の市立高校からも受講希望があれば、連携を拡大していくことは可能と思われる。各学校からの要望をある程度開講講座に反映させることも可能。市立高校改革で掲げている学校間連携や単位互換のモデルケースとして捉えることもできるのではないかと。

(4) 報告書の取りまとめについて

今年度の外部支援員2名が事務局の報告書作成を支援してくれることになっている。今後、取材や原稿依頼等で委員各位とやり取りする場面が出てくるかもしれない。報告書の作成作業は、1月中旬から2月一杯を予定しており、その全体像が見えてくる2月後半に第4回の会議を開催予定している。

4. 閉会

平成 28 年度 第 4 回市立高校外部の専門人材活用推進委員会

日 時	平成 28 年 2 月 27 日（水） 13:30～15:30
場 所	札幌開成中等教育学校 1 階会議室
出席者	（委 員）相沢副委員長、岡部委員、岩本委員、西野委員、黒井委員 原田委員、ディクセット委員 （事務局）幸丸、小林、広川

1. 開会

2. 教育委員会挨拶

3. 協議内容

（1）これまでの調査研究の報告

五つある各検討ワーキングの状況について、それぞれ報告を行った。特に特色ある取組の共有検討ワーキングと特別免許取得に向けた研修の在り方検討ワーキングについて、具体的な資料を用いて説明を行った。

特色ある取組の共有検討ワーキングでは、アニマドレープロジェクトの活動をまとめた報告書をもとに、次年度は同じ枠組みでもう一度実施し課題の整理を行った上で、平成 30 年度から札幌大通高校、札幌開成中等教育学校以外の学校からの参加も可能とする方向性が示された。また、アニマドレープロジェクトと同様、複数の高校が連携して実施する可能性のあるプログラムとして、「(仮) まちなかの職業体験企画案」について紹介された。

特別免許取得に向けた研修の在り方検討ワーキングでは、外国人教員に実施したアンケート調査の結果について報告があった。その要点は次の通り。

- 週に一回程度、指導教員の立場で外国人教員の相談を受けるメンター制度を導入すべきではないか。
- 他の教科や他校の授業を見学する機会を設けると良いのではないか。
- 札幌市が発行している外国人向けの「くらしのガイド」をオリエンテーション時に配付し、説明すると良いのではないか。
- よくある質問を FAQ の形にまとめ、応募者に情報提供すべきではないか。
- 特別免許を取得し、一人で授業を行う前に IB 公式ワークショップを受講できると良い。その場合、英語によるワークショップが受講できるとなおよい。

（2）事業成果報告書の取りまとめについて

現在作成中の事業成果報告書（案）について提示し、その概要を説明した。意見等がある場合は、適宜事務局に寄せることとし、今後の作成作業について事務局に一任した。

(3) 今後の調査研究に向けて

コンシェルジュ組織の在り方検討ワーキングにおいて協議されている、市立高校コンシェルジュの役割と学校と外部人材とをつなぐ組織の在り方について各委員から意見を募った。主な意見は次の通り。

- 市立高校コンシェルジュと学校と外部人材とをつなぐ組織の関係を考えたときに、後者が前者の下請けのように見えない示し方が必要である。その場合、学校と外部人材とをつなぐ組織のメンバーが活動意欲や動機を持てるように工夫しなければならない。
- 市立高校コンシェルジュの役割としては、各校の取組を広く伝え、協力した個人・団体を前向きに取り上げる広報活動と外部人材とのマッチングがメインとなるだろう。なお、市立高校コンシェルジュはあくまでもマッチング機能を果たす存在であり、個別の取組の中に関わってしまうとすぐに対応しきれなくなることに留意する必要がある。
- 各校に協力する外部人材や企業、大学の動機の一つは、自分たちの取組を客観的に捉えて評価してもらえたり、それらを学校が取り上げてくれることで、結果的により多くの人に理解されることによって、協力する側も満足感が得られるとの話もあった。
- 他方で、協力する側が必ずしも好意的であるとは限らないため、いかにして好意的に捉えてくれる外部人材等を探すかが課題となる。
- 学校と外部人材とをつなぐ組織には1校に1人、あるいは2校に1人の担当者を張り付け、市立高校コンシェルジュに速やかに報告する体制を作らないと、組織が機能しないのではないかと。
- 学校と外部人材とをつなぐ組織は、外部人材活用の際に発生する費用を調達したり、教員を下支えしたりすることで、教員の過度な負担を軽減する機能も併せ持つ。

4. 閉会

Ⅱ 調査研究ワーキングの活動報告

1 コンシェルジュ組織の在り方検討ワーキング

調査研究の概要

◆課題認識

- ・これからの学校に求められる「社会に開かれた教育課程」実現のためには、外部の専門人材との連携が重要。
- ・これを学校だけで担おうとすると、教員に過度の負担がかかる。

◆調査研究の目的

- ・教員に過度の負担をかけずに、外部の専門人材との連携を進める方策として、コンシェルジュ組織による支援の仕組みを構築すること。

◆調査研究の方法

- ・市立高校教員OBや外部支援員を交えた検討ワーキングにおいて具体的に検討。

◆調査研究の対象

- ・札幌市立高校全体

◆調査研究から見えてきた現状

- ・「コンシェルジュ組織の在り方」という表題が示すように、当初は、コンシェルジュの役割を組織が担う前提で検討をはじめたが、検討する中で、コンシェルジュの役割を担う外部人材と学校と外部人材をつなぐ組織を別のものとし考えるべきとの議論になった。
- ・コンシェルジュの役割を担う外部人材は、教育委員会の制度の中に位置付けることが望ましいとの議論になった。

取組のポイントと成果

◆取組のポイント

- ①市立高校コンシェルジュの役割
 - ・広報活動の機能
 - ・学校と外部人材とのマッチング機能
- ②学校と外部人材をつなぐ組織の在り方
 - ・特色ある取組を継続可能にする仕組みの構築
 - ・教員の過度な負担を軽減すること
- ③学校と外部人材をつなぐ組織の形態
 - 法人化のメリット
 - ・信用度が高まる
 - ・国の助成事業などに応募できる
 - ・寄付金等の税額控除の制度がある
 - 法人化のデメリット
 - ・法人設立には一定数の賛同者が必要
 - ・設立時の費用及びランニングコスト
 - ・活動内容に制限がある

◆取組の成果

- ◎「市立高校コンシェルジュ」の制度化
 - ・検討ワーキングの議論を「札幌市立高校教育改革方針」に生かすことができ、平成29年度からの「市立高校コンシェルジュ」の制度化（2名配置）につながった。
- ◎市立高校を支援する枠組みの全体像が見えてきた。こうした組織の必要性を確認できた。
- ◎コンシェルジュ組織を法人化する場合に必要な基礎資料を整理した
 - ・工程表
 - ・規約
 - ・手続き
 - ・設立経費とランニングコスト
 - ・組織化する場合の人選

注) コンシェルジュとは、本来、ホテルなどの案内係や特定分野の情報などを紹介・案内する人のことを指す言葉。ここでは、学校が新たな取組を実践するにあたり、外部人材と学校とをつなぐための調整役を果たしたり、学校の取組を発信したりする機能をもった総合調整役のことを指す。

今後の課題

◆学校と外部人材をつなぐ組織の在り方について

- ・誰がこの組織の運営を担うのか、また、必要経費をどのように確保するのか
- ・組織を法人化すべきかどうか。

◆市立高校コンシェルジュによる広報活動について

- ・情報発信の対象は誰か。動画配信は可能か。情報の鮮度をどのように確保するか。

1 調査研究の概要

○ 課題認識

これからの学校に求められているのは、教員だけが教育に携わるのではなく、様々な経験を積んでいる外部人材と連携することで、より社会のニーズに合った質の高い教育を提供することである。そのためには、学校や教育課程を社会に開いて外部人材が当たり前のように授業に関わることが想定される。しかしながら、現状のまま実施しようとすると、そのノウハウのない教員にとっては大きな負担となりかねない。そこで、学校と外部人材とをつなぐための仕組みが必要となる。

○ 調査研究の目的

現状のまま外部人材と連携しようとすると、教員の負担が大きく「社会に開かれた教育課程」に挑戦する時間的な余裕がない。教員に過度な負担をかけることなく、学校が外部人材との連携を進めるための仕組みを検討すること。

○ 調査研究の方法

検討ワーキングにおいて、市立高校教員OBや外部支援員を交えて、具体的な検討をすることとした。

○ 調査研究の対象

札幌市立高校全体の枠組みを検討することとした。

○ 調査研究から見てきた現状

昨年度の調査研究では、学校と外部人材とをつなぐ組織全体をコンシェルジュ組織として位置付けており、当初は、コンシェルジュの役割を組織が担う前提で検討を開始した。しかし、今年度の検討を進める中で、学校から見ても外部人材から見てもコンシェルジュの役割を担うのはあくまでも人であり、コンシェルジュの役割を担う外部人材と学校と外部人材をつなぐ組織とは別に考えるべきではないかとの議論になった。

この場合、コンシェルジュの役割としてまず考えられるのは、多忙な教員に代わって、外部人材と連携した各高校の特色ある取組を学校内・外に発信するなどの広報活動の役割と、学校と外部人材とをつなぐマッチングのための総合調整役としての役割の二つである。これらの役割を担う外部人材としてのコンシェルジュは、教育委員会の制度の中に位置付けるべきであると考えられる。

その上で、コンシェルジュの役割を担う外部人材と連携して、学校と外部人材とをつなぐための組織が必要になってくるのではないかとの議論になった。その組織をNPO法人などの法人化する場合、メリット・デメリットの両方があり、また、外部人材が主体的に組織すべきものと考えられるため、今年度の検討では課題整理をすところまでで検討を終えた。

2 取組のポイントと成果

(1) 市立高校コンシェルジュの役割

学校と外部人材とが連携し特色ある取組を行うにあたって、その取組を学校内や学校外に発信して広めるための広報活動の機能と、学校と外部人材とを適切につなぐマッチング機能が必要である。これらの機能を担うのがコンシェルジュの役割であり、教育委員会では検討ワーキングの議論を「札幌市立高校教育改革方針」に生かし、平成29年度から2名の外部人材を「市立高校コンシェルジュ」として制度化することができた。

「市立高校コンシェルジュ」のうち1名は、市立高校の特色を十分理解している人材、もう1名は、幅広い企業や大学等の外部人材とつながりをもつ人材に委嘱することを想定している。

(2) 学校と外部人材をつなぐ組織の在り方

調査研究の開始当初は、学校と外部人材をつなぐ組織全体をコンシェルジュ組織と考えていたが、検討を進める中で、この組織そのものはコンシェルジュではなく、広報活動と学校と外部人材とのマッチングを担う市立高校コンシェルジュを支える組織ではないかとの結論に至った。

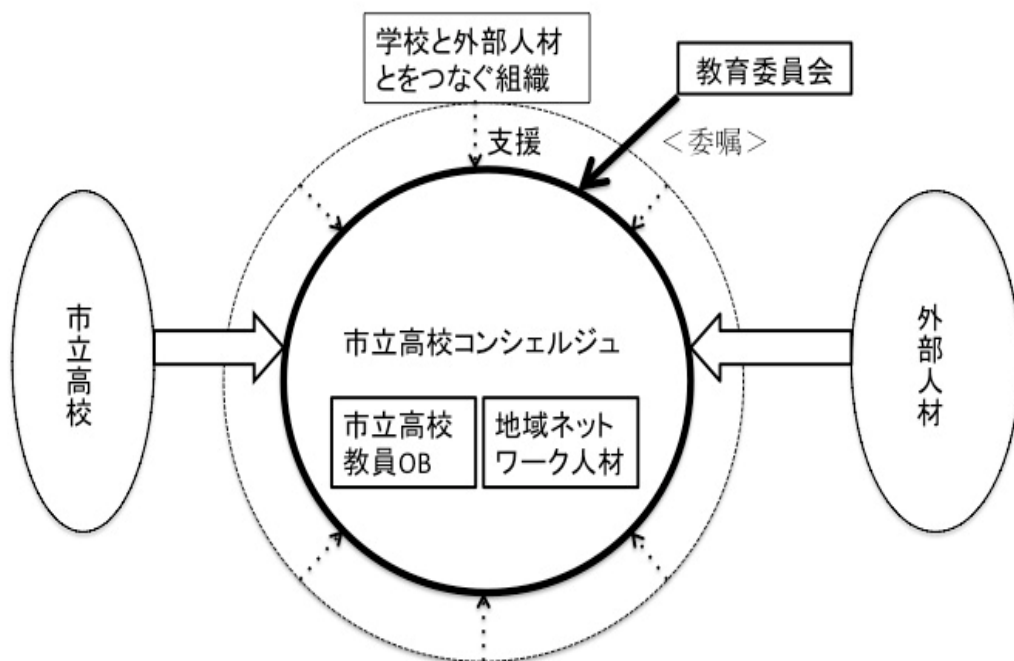
市立高校コンシェルジュが学校から受けた相談は、まず2名のコンシェルジュの間で共有し、次にコンシェルジュの持つ外部人材とのネットワークを用いて学校と外部人材とをマッチングしていくことになるが、ゆくゆくは、コンシェルジュだけで全ての学校の要望に応えることは難しくなることが想定される。

そこで、コンシェルジュとは別に、自主的に市立高校を支えようとする人たちが構成される組織が、コンシェルジュからの求めに応じて経済的、人的支援などを行う仕組みを考えておく必要があるのではないかとの議論になった。

この場合、学校と外部人材とのマッチングを支援だけでなく、この組織が教員の担っている役割の一部を担うことで、結果として教員の過度な負担を軽減することも期待されるが、そのためには、人材確保のための経済的基盤を持つことが必須となる。

これらのことを図として示したのが次のイメージ図である。

市立高校コンシェルジュと学校と外部人材をつなぐ組織のイメージ図



(3) 学校と外部人材をつなぐ組織の形態

学校と外部人材をつなぐ組織の形態についても検討を行った。考えられる形態としては、任意団体や法人組織がある。法人組織とする場合は、さらにNPO法人や一般社団法人などが考えられる。検討ワーキングでは法人化するならNPO法人が良いのではないかと議論になったが、法人化にはメリットとデメリットの両方あるのは事実であり、今年度中に結論を出すまでには至らなかったが、次年度以降の検討に備えて課題を整理した。

○ NPO法人化のメリット・デメリット

組織をNPO法人化する場合のメリット	組織をNPO法人化する場合のデメリット
<p>◎社会的信用度が高まる</p> <p>学校と外部人材をつなぐ組織として活動を行っていく上で、対外的信用が必要となる場合は多くあると考えられる。その際、任意団体での活動よりも法人として活動していた方が相手に安心感を与えることができると言われている。</p>	<p>●NPO法人の設立には一定数の賛同者が必要</p> <p>NPO法人では、設立時の社員が最低10人必要となる。検討ワーキングにおいては、この10人をどのようにして、どのようなメンバーで集めるかが課題となった。</p>
<p>◎助成事業などに応募できる</p> <p>法人化によって国などの調査研究事業に応募したり、国の補助金を受けたりすることが容易になる。またNPO法人は非営利組織であることから、寄付金も集めやすくなると言われている。</p>	<p>●設立時の費用及びランニングコスト</p> <p>実際にNPO法人を設立する場合には、所在地の確保や備品の購入などの初期費用がかかり、活動を続けていく上では、通信費や人件費などのランニングコストもかかる。検討ワーキングではNPO法人の運営にかかる費用を算出した上で、クラウドファンディング等の手法も含めて資金を確保する方法について検討した。</p>
<p>◎税金の面で有利になる</p> <p>NPO法人の場合、収益事業に該当しない非営利活動の収入には課税されないメリットがある。また、場合によっては寄付をする側のメリットもあり、寄付金を集めるときに有利であると言われている。</p>	<p>●活動内容に制限がある</p> <p>NPO法人では活動内容が法律や定款の制約を受けるため、それらに定められていない活動は行うことができない。したがって、法人設立前に十分な事前準備が必要となる。検討ワーキングにおいても、定款に記載する活動方針や活動内容をどのように規定するかを検討した。</p>

○ 設立までの工程

仮に、平成29年度にNPO法人を設立しようとする場合、設立発起人会の開催から設立登記完了まで7ヵ月程度かかると言われているため、4月に設立発起人会を開催した場合でNPO法人化されるのは10月頃になると想定される。検討ワーキングで想定した設立までの工程は次の通り。

◆NPO法人設立までの期間◆

1月目	2月目	3月目	4月目	5月目	6月目	7月目
H29.4	H29.5	H29.6	H29.7	H29.8	H29.9	H29.10
	前半 後半					
設立発起人会の開催	設立総会の開催 所管庁への認証申請	← 縦覧・認証期間 →			「認証書」が届く 設立登記の申請 法人設立の日	設立登記完了 「設立登記完了届」を提出

この間は法人格のないNPO(任意団体)としての活動はできる。また、「NPO法人設立準備中」として、協力を呼び掛けることは可能。

この期間が、初年度の事業期間となる。

3 今後の課題

- 学校と外部人材とをつなぐ組織の在り方について

今年度の検討では、学校と外部人材をつなぐ組織について、全体像を示すとともに、法人組織とする場合の課題を整理するところまでにとどまった。この組織を実際に設立する場合には、誰がこの組織の運営を担うのか、また、必要経費をどのように確保するのか、法人化する場合のスケジュールをどうするかなどの課題を解決していかなければならない。

なお、ここから先の議論は、市立高校を支えようという志を持つ外部人材に委ねることになるとと思われる。

- 市立高校コンシェルジュによる広報活動について

市立高校コンシェルジュは、各市立高校から情報を得てWeb上に情報を発信することが考えられるが、その場合、セキュリティ上の観点から、教育委員会や各学校の公式ホームページとは別に、新たに外部サーバーを用意する必要があることがわかった。ただし、その場合は、札幌市のセキュリティポリシー上の手続きをとる必要があり、今年度中に実現することはできなかったが、来年度からの運用の目処がついた。今後は、誰に向けて情報を発信するのか、動画による配信は可能かどうか、時期を逸することなく適切なタイミングで情報発信する方法などについて、具体的に検討する必要がある。

4 検討ワーキングメンバーと活動記録

- 検討ワーキングメンバー（敬称略）

相沢克明（外部の専門人材活用推進委員会副委員長、札幌開成中等教育学校校長）

岩本 隆（外部の専門人材活用推進委員会委員、支援員、元市立高等学校校長）

富田淳一（支援員、元市立高等学校校長）

山本章吾（支援員、札幌国際バカロレア公式ワークショップ実行委員会事務局）

小林英輔（外部の専門人材活用推進委員会事務局、札幌市教育委員会）

広川雅之（外部の専門人材活用推進委員会事務局、札幌市教育委員会）

- 活動記録

第1回 平成28年6月21日（火）

第2回 平成28年7月5日（火）

第3回 平成28年7月19日（火）

第4回 平成28年8月12日（金）

第5回 平成28年9月6日（火）

第6回 平成28年9月20日（火）

第7回 平成28年10月11日（火）

第8回 平成28年11月1日（火）

第9回 平成28年11月15日（火）

第10回 平成28年12月6日（火）

第11回 平成29年1月19日（木）

第12回 平成29年2月17日（金）

第13回 平成29年2月28日（火）

Ⅱ 調査研究ワーキングの活動報告

2 教員研修としてのIB公式ワークショップ運営検討ワーキング

調査研究の概要

◆課題認識

・IB公式ワークショップの開催には運営業務が発生するが、受講する教員が担うと研修に専念できない。

◆調査研究の目的

・外部支援員を活用してIB公式ワークショップを運営し、そのノウハウの蓄積を図り、受講する教員が研修に専念できる環境を整えること。

◆調査研究の方法

・IB公式ワークショップ運営のための実行委員会を組織して、その事務局に外部支援員を活用し、実際の運営を行う。

◆調査研究の対象

・IB公式ワークショップ参加者
札幌開成中等教育学校教員
他の札幌市立学校教員
札幌開成中等教育学校保護者等

◆調査研究から見えてきた現状

・外部支援員は、受講者の取りまとめ、使用物品等の購入、会場設営や復原、当日受付、収支決算などの業務を担うこととなったが、適宜検討ワーキングで進捗状況を確認することにより、予定通りワークショップの運営を行うことができた。
・次年度以降の継続的な開催のために、「運営マニュアル」の作成が必要である。

取組のポイントと成果

◆取組のポイント

①ノウハウの蓄積

・IB公式ワークショップの運営に外部支援員が携わり、ワークショップ終了後の振り返りの場面にも協力してもらうことで、次回開催に向けた改善ポイント等を明らかにすることができ、運営ノウハウを蓄積することができた。

②検討ワーキングによる協議の活用

・運営に際しては、適宜検討ワーキングを開催し、運営業務の進め方を確認し共有することで、初めて運営に携わる外部支援員であっても運営業務を行うことができた。

・IB公式ワークショップ終了後も検討ワーキングを継続し、運営の振り返りを行うことで、次年度以降の継続的な開催に必要な「運営マニュアル」を作成するための改善ポイント等を整理することができた。

◆取組の成果

・IB公式ワークショップの受講者を対象として行ったアンケート調査の結果、このワークショップは教員研修として有効であるとの評価を得ることができた。また、受講した保護者からの評価も高く、IBの教育プログラムを活用した課題探究的な学習への理解も深まったことが推測できる。

・IB公式ワークショップを通して、IBを活用した課題探究的な学習の成果を他の札幌市立学校と共有するための資料を蓄積することができ、ワークショップの成果発信検討ワーキングにおける『教室で使えるグループワーク』という冊子の作成に結びついた。
※詳細はワークショップ成果発信検討ワーキングのページを参照のこと。

・外部支援員を活用してIB公式ワークショップを運営するための「運営マニュアル」の作成に結びついた。

今後の課題

◆外部支援員に関すること

・ワークショップ運営に協力してくれる外部支援員の輪を広げること。
・外部支援員に英語での対応が求められる場合があること。(英語しか話せない受講者への対応など)

◆運営に関すること

・札幌市以外からの参加希望者の受講を可能とするためには、事務局機能の強化が必要。

1 調査研究でワークショップ運営を取り上げた理由

国際バカロレア（IB）公式ワークショップは、国際バカロレア機構（IBO）からワークショップリーダーを研修講師に招いて行う教員研修であり、外部の専門人材を活用して教師力向上を図る観点から有効であると考えられる。しかしながら、このワークショップの開催には様々な運營業務が発生するため、その業務を誰が担うのかということが課題となる。そこで、実際に開催されるワークショップを調査研究の対象とし、外部支援員を活用した運営によるワークショップ実施を試みることにした。

※IB 公式ワークショップとは

IBO が教員研修として主催するワークショップのこと。IB の認定を目指す学校の管理職や教員はこのワークショップを受講する必要がある。

2 調査研究の概要

○ 課題認識

ワークショップ開催には受講者の取りまとめや、当日の受付など様々な運營業務が発生するが、これらの業務を受講者である教員が全て担ってしまうと研修に専念することができない。

○ 調査研究の目的

ワークショップの運營業務を外部支援員が担う形で開催し、そのノウハウの蓄積を図る。このことにより、受講者である教員は研修に専念することができ、受講する教員の教師力の向上を図ることが期待できる。

○ 調査研究の方法

ワークショップの運営を行う組織として実行委員会を組織し、その事務局に外部支援員が入り、実際のワークショップ運営の全てを実践してみることとした。

○ 調査研究対象

平成 28 年度は、次の通り実施した。

・受講者

札幌開成中等教育学校教員、保護者等、他の市立小中高教員

・開催日程

平成 28 年 7 月 26 日（火）～ 7 月 29 日（金）

・開催ワークショップの種類

①IB セミナー（教員・保護者等）

②探究ワークショップ（教員）

③DP 導入ワークショップ（教員・保護者）

④プロジェクトワークショップ（教員）

○ 調査研究から見えてきた現状

外部支援員は、受講者の取りまとめ、使用物品等の購入、会場設営や復原、当日受付、収支決算などの業務を担うこととなったが、適宜検討ワーキングで進捗状況を確認することにより、予定通りワークショップの運営を行うことができた。

なお、外部支援員がこうした業務を担う形でのワークショップ運営のためには、運営マニュアルの作成が必要であることが確認できたため、ワークショップ終了後も引き続

き検討ワーキングを開催し、運営マニュアル作成のための準備を行った。これにより、次年度以降も札幌で継続的にワークショップを開催することが可能になると思われる。

3 取組のポイント

(1) ノウハウの蓄積

実際に開催したワークショップの運営に外部支援員が携わることで、次のような運営のノウハウを蓄積した。

○ 運営ノウハウの具体例

・受講者の申込に関すること

IBO に提出する入力フォームが英語表記であるため、受講者の参加申込を集約する際には、氏名の正確な綴りを確認しておく必要がある。

・ワークショップに必要な物品の借り方、購入方法

ワークショップでは、講師や受講者が使用する物品やケータリングを準備し、教室のインターネット環境を整えるためポケット Wi-Fi を設置する必要がある。物品を用意するには同じ業者からまとめて購入することで送料が無料になるなどのノウハウがあることがわかった。ポケット Wi-Fi のレンタルにおいては、実行委員会名義で契約可能なレンタル業者を探す必要がある。これらの物品購入や Wi-Fi 環境の構築の詳細については、別に作成する予定のワークショップの「運営マニュアル」に記載する予定。

・ワークショップ当日の運営に関すること

外部支援員は、会場設営や受講者の受付などワークショップ当日に発生する全ての業務を行った。その中でも、受講者受付の際の受講者名簿を IBO に提出した状態のまま使用したため、氏名などが判別しにくく、円滑に受付業務を行うことが難しかった。次回以降は名簿を見やすい形に作成し直す必要があるなど、次回以降の当日運営業務への改善点が明確になった。

・受講者へのアンケートの実施や集約に関すること

実行委員会事務局では、ワークショップの受講者へのアンケート調査を行い、次回以降の開催の参考にしている。またその結果を集約し分析することで、ワークショップの成果を他の札幌市立学校教員と共有するための議論につなげることができた。

(2) 検討ワーキングによる協議

外部支援員は、必ずしもワークショップの意義やワークショップとは何なのか、また、実行委員会形式で行う理由について知らない状態からの協力となるため、検討ワーキングにおいて実行委員会や IB コーディネーターからの助言内容などを適宜確認し、業務の進め方や準備の状況などを共有することで、運営業務への協力を容易にした。また外部支援員の中に、ワークショップ運営の具体的な準備などについてのノウハウが蓄積されたので、IB 公式ワークショップ終了後も検討ワーキングを継続し、運営の振り返りを行い、次年度以降の継続的な開催に必要な「運営マニュアル」を作成するための改善ポイント等を整理することができた。

4 取組の成果

ワークショップ受講者に対して実施したアンケート調査を集約した結果、ワークショップは大変好評であった。例えば、「課題を実践することによって探究型学習とはどういうものか理解しやすかった」、「アクティビティが楽しく分かりやすかった」、「ワークショップなどを通して実践的な授業の進め方について理解することができた」などの意見が出ており、教員研修として有効であると確認することができた。また、実際のワークショップ運営や事前の検討ワーキング、そしてワークショップが終わった後も運営に携わった外部支援員の協力を得て、振り返りのための検討ワーキングを継続することで、外部支援員が経験し、蓄積したノウハウを活かした「運営マニュアル」の作成につながった。更に、アンケート調査から見えてきた課題探究的な学習の課題や、札幌開成中等教育学校の教員がIB 公式ワークショップで得たことを日常の授業の中で実践し、そのコツや改善点などを『教室で使えるグループワーク』という冊子にまとめることができた。(詳細は、IB 公式ワークショップ成果発信検討ワーキングの活動報告を参照のこと。)



△ワークショップ教室の掲示物



△ケータリング設置の外観



△IB オリエンテーションセミナーでの
アクティビティ（ヘリウムスティック※）



△ワークショップ風景

※ヘリウムスティックとは

棒状に丸めた新聞紙を複数人の指で支え、床までおろす協働作業。グループでの課題に取り組む前に、お互いを知るためのアクティビティの一つ。

ワークショップ受講者に実施したアンケート結果

- Q 公式ワークショップに参加して、印象に残ったことを一つ具体的にお書きください。
(原則として回答は原文のまま)
- IB オリエンテーションセミナー
- 新しいアルファベットの例を使用した概念理解についての説明。考えることは大切だが、概念理解も重要だと感じました。(教員)
 - 課題を実践することによって、探究型学習とはどういうものか理解しやすかったといます。(保護者)
 - 「探究を基盤とした指導の話題」
 - ・子供を育てる上で家庭という礎の中で実践していけることを学びました。(保護者)
 - ・幼少期(現在小6)より IB の原理を取り入れている事で、「自律的な生涯学習者」の準備に取り組めているように思い、手応えも実感しました。(保護者)
 - 「自分と異なる考えの人々にもそれぞれの正しさがありえると認めることのできる人」、ザ・ヘリウムスティック1つで話したことの無いグループで仲間になれる。(保護者)
 - 子ども達がどのように学んでいるかが一番興味のある事でしたので、グループワークを体験できた事で具体的なイメージをつかむことができました。(保護者)
 - ワークショップを通して、わからなくても自分の考えを書く、述べる事によって、そして、グループで話し合う事によって、あらゆる方向から思考力が磨かれるのだと思いました。(保護者)
 - ヘリウムチャレンジ大変難しかったです。原理はシンプルなのに”協働”という事がどれだけハードルが高いか身を持って理解できました。本日は貴重な機会ありがとうございました。(保護者)
 - 初めは普通の中学校では、発達障害の生徒も多い中で探究型は難しいと感じた。しかし、まずは簡潔なレベルのものから始め、経験を積み上げていくことで可能なのではと思った。特に「協働」することは、現在の日本社会において大変必要なものであると思った。今までの「チームワーク」の更に上をいく、またはより視野の広いもので、今後、この考えを広めていくことは大変重要である。もっと学んでみたい。(教員)
 - IB の理念をどう指導すれば達成していけるのか、そういうヒントをもらえる教師向けのセミナーだと勘違いしていたので、少し残念でした。印象に残ったのは、ヘリウムスティックです。やってみてあれほど難しいとは予想もできませんでした。(教員)
 - グループで氷が溶けた水の量について考えた時に自分の考えを書くことに少し不安を感じました。人の前で自分の考えを述べることは大変だということを改めて実感しました。自分と他の人の考えをお互いに認め合うことが大切だということも学びました。(保護者)
 - 自分と違う考えがあるという事を認め合うという部分が印象に残りました。教室の様な小さな世界でも、国と国という様な大きな世界においてもとても大切な考え方だと思いました。(教員)
 - 「答えのない問題」を探究するのも面白いものだと実感しました。(大人になると照れ

と遠慮があって、自分の意見を強く出せないところもありますが)。今回使われたパワーポイントの画面を印刷したものが欲しいと思いました。とても分かりやすかったので・・・。(保護者)

- ①IB が理想とする人間像としての「国際的」の意味。→社会構成主義や社会構築主義とのつながり
- ②概念理解の重要性→センター試験の高得点にもつながる。(教員)
- 今日の内容が保護者の方にどう受け止められたかがいちばん気になりました。(理解できたか、よい気持ちで聞けたか)(教員)
- 協働の考え方、奉仕活動の考え方をお聞きし、このような教育の枠組みが世の中に広まれば互いを尊敬できるより良い社会になると思う事ができました。又、このような態度は社会に出て即役立ち、教養のある大人として大切だと感じました。(保護者)
- 社会への奉仕。自分がコミュニティに何ができるかと考えるという事。特別な事でなく、他者と自己を見つめるプログラムなんだと感じた。(教員)
- やはり自分は型通りの考え方なんだなーと実感しました。氷の問題、艦船の問題にしても考えたことはありませんでした。このような問題に関して取り上げる学習を受けるだけでも、柔軟な発想ができるのではないかと思います。(保護者)
- 普段私があまり使わない頭(考え方)をたくさん使ったと感じました。PS,当日の予定を変更して進める所は開成の得意な形ですね(笑) Mr.亀田。質疑の回答がキラキラでした、素敵。(保護者)
- 今まで外側の大まかな部分しかわからなかったが、具体的な教育プロセスまでわかったこと。奉仕活動のことや構造化された導かれたオープンな探究等。(教員)
- 探究ってきくと主体的、能動的というイメージがあるので「理解している事柄からスタートする」「教えるところは教える」という方針はいがいででした。(教員)
- 奉仕活動と概念理解について。ボランティア的なものと思っていましたが「協働で行う」ところまで発展させる(考え)等深いなと思い、今後、子供と考える機会をもうけようと思いました。(保護者)

○ DP 導入ワークショップ

- 「歴史」と「過去」について考えたことが自分自身の考えを紙面に書いて自分がどう思っているのかを認識する良い機会だったと思います。子どもたちが受けている学習を体験することによって、自分がもう少し柔軟な考え方ができたらと思いました。(保護者)
- 自ら学び、学ぶことが楽しいと思えるとてもよいものだと思います。先生方と一緒に学ぶという経験はとても新鮮ですごく楽しかったです。意見を交換することがすごく大切だなあということがすごく印象に残りました。(自分が考えていることとは全く違う意見が出てくるのが楽しかったです)(保護者)
- じっくり取り組めた感です。自分のアウトプット力の無さに打ちひしがれましたが、いっぱい刺激をいただきました。お話ししていただく先生方みなさんが聞く人をひきつけるパワーをお持ちで、楽しい1日でした。家事をほったらかしにして参加したかいがありました。(保護者)

- DP の奉仕とはどのような内容なのか少しだけ理解できた。DP での探究型、概念型の学習のワークショップなどを通して、実際的な授業の進め方について理解することができたかなと思います。ファシリテーターとしての教師となるように。(教員)

○探究ワークショップ

- 開成の生徒を相手に授業を実際にできたことです。いい意味で予想を超える反応が返ってきて「ウレシイ悲鳴」をあげそうになりました。ファシリテーターのおふたりも、とってもステキな方で、3日間勉強になりました。ありがとうございました。(教員)
- PYP の学習についても教えていただき。小学校の教員としてもとても勉強になった。まだまだ子ども達が主体的！！と言える授業・実践が少ない中、教科横断的なカリキュラムの構築は、小学校教諭としてこれからさらに大切になってくると感じる。そのことも考え、自分自身で実践していきたい。(教員)
- 「1つ」にしぼり切れないほど Impressive な体験が連続した3日間でした。あえて一つ選ぶなら、開成の教頭先生と2人で「Art」としての collaboration ができたこと。模擬授業しながら自身の教師としての暗黙知をメタ認知する得難い機会となりました。来年以降もワークショップが続くことと、広く今回の学びが札幌市の財産として共有されることを期待します。ありがとうございました。(教員)
- I have learned a different way to teach. Thank you. (違った教え方を学びました。ありがとうございます。)(教員) ※日本語訳：外部支援員
- 課題設定の仕方や振り返りなど、重要なことを学ばせていただきました。他のワークショップにも参加したいです。(教員)
- 事実に関する質問、概念的質問、debatable な質問の中で概念的質問を考えるのが最も難しかった。しかし、しっかり考えるとそれは生徒にとっても答えやすいものになるということもわかった。我々の授業の目的というのが、何かその場限りということがあるのだが、「探究テーマ」というのは「10年後に生徒が覚えておいて役に立つこと」なので、それをしっかり設定することで授業が日常や社会との関係をもったものになるということがわかった。(教員)
- 授業者＝学習者(先生から学ぶ⇔生徒から学ぶ)自分も常に探究者でありたいと思った。(教員)
- 「アクティブラーニングの弱点」というユーチューブのビデオを全員で視聴して、アクティブラーニングを否定的にとらえる立場の側の主張にも耳を傾けて考えるきっかけとしたこと。アクティブラーニングには、①教え方にムラができる、②学び合うにもグループの習熟度が問題になる、などの問題点が指摘されていた。もう一度じっくりと考えてみたい。(教員)

○プロジェクトワークショップ

- グローバルな文脈が今までいまいち理解できていなかったが、今回のワークショップでかなり理解が深まった。パーソナルプロジェクトを進める上で、グローバルな文脈をレンズとして活用することでトピックが同じでも様々な方向にプロジェクトが進むということが印象的だった。(教員)

- Personal Project はまさに MYP の集大成としてふさわしいものだということがよく分かりました。PP に向けて今から各教科でできることに取り組みながら教員も生徒も準備をしていくことが大事であるし、並行して学校の体制づくりを進めていくことが非常に大事だと思います。具体的には、日頃から個人・社会のニーズに対してアンテナを高く持てるような授業展開にすること、グローバルコンテクストを理解し取り入れていくこと、ATL スキルを理解し身につけられるようにすること（Time management のスキル等を身につけられるようにする）、評価規準を自ら設定できる機会を設けること等である。（教員）
- とにかく考える！特に質問を考えるときはどうしたらもっと議論が深まるか、どんな答えが来るか予想しながらやっていました。授業をもっと豊かにする方法は無限にあるなぁと思いました。（教員）
- Being put in the position of a student gave me the opportunity to see how important it is that we prepare our students thoroughly. If we as teachers don't clearly understand criteria and requirements, we will not be able to guide and supervise our students effectively.（生徒の立場になることで私たちが生徒に対して徹底的に準備することが大切だとわかる機会になりました。もし私たちが教師として評価基準や必要条件を明確に理解していなければ、生徒を効果的に導き、監督することはできないでしょう。）（教員） ※日本語訳：外部支援員
- パーソナルプロジェクトを自分で書いてまとめてみたことと、それを IB の評価規準に照らし合わせて、評価したことで、あらためて世界の基準の中で学んでいることを実感しました。（教員）

5 今後の課題

(1) 外部支援員に関すること

- ワークショップ運営に協力してくれる外部支援員の輪を広げること
ワークショップ運営に協力してもらう外部支援員を募る際には、ワークショップの開催日程上、平日の業務が可能なことや、教育に対して興味・関心をもっていることが必要である。外部支援員に対しては、協力を得るときのみ関わるのではなく、ワークショップ運営が終了した後も継続的に連絡を取り合うことで人脈を大切に、外部支援員の輪を広げていくべきである。
- 外部支援者に英語での対応が求められる場合があること
英語しか話すことのできない受講者がいた場合、受講申込のメール対応やワークショップ当日の対応を英語で行う必要がある。外部支援員のうちできれば一人は日常会話が可能程度の英語力があることが望ましい。

(2) 運営に関すること

札幌市立学校以外の受講者を受け入れるためには、事務局は受講者からの問合せ（英語対応も含む）や、札幌市と会場までのアクセスマップの作成とその送付、当日のタクシーの手配などを行う必要がある。そのためには、外部支援員の増員も考慮に入れた事務局機能の強化を図らなければならない。

6 検討ワーキングメンバーと開催日程

- 検討ワーキングメンバー（敬称略）
 - 山本章吾（支援員、札幌国際バカロレア公式ワークショップ実行委員会事務局）
 - 小林英輔（外部の専門人材活用推進委員会事務局、札幌市教育委員会）
 - 広川雅之（外部の専門人材活用推進委員会事務局、札幌市教育委員会）
- 活動記録
 - 第1回 平成28年6月27日（月）
 - 第2回 平成28年7月8日（金）
 - 第3回 平成28年7月15日（金）
 - 第4回 平成28年7月20日（水）
 - 第5回 平成28年7月25日（月）
IB公式ワークショップの実施（平成28年7月26日（火）～29日（金））
 - 第6回 平成28年8月8日（月）
 - 第7回 平成28年8月24日（水）
 - 第8回 平成28年9月12日（火）
 - 第9回 平成28年10月4日（火）
 - 第10回 平成28年10月11日（火）
 - 第11回 平成28年10月21日（金）
 - 第12回 平成28年11月2日（水）

Ⅱ 調査研究ワーキングの活動報告

3 IB公式ワークショップの成果発信検討ワーキング

調査研究の概要

◆課題認識

・札幌開成中等教育学校のIBの教育プログラムを活用した課題探究的な学習を他校にそのまま導入することはできないが、その成果を他の市立学校と共有する必要がある。

◆調査研究の目的

・IBの教育プログラムと課題探究的な学習とは共通の学習形態がみられることに着目し、他の市立学校でも参考にできる要素をまとめ発信することで、市立学校教員全体の教師力向上を図ること。

◆調査研究の方法

・IB公式ワークショップ受講者を対象にアンケート調査を実施する。

・IB公式ワークショップの成果を取り入れている札幌開成中等教育学校の授業の状況を分析する。

◆調査研究の対象

・IB公式ワークショップ参加者
札幌開成中等教育学校教員
他の札幌市立学校教員
札幌開成中等教育学校保護者等

◆調査研究から見てきた現状

・IB公式ワークショップで多用されるグループワークの手法を日常の授業で実施する場合に、様々な「困り」の状況が生まれたことから、グループワークに焦点を絞り、IBを参考にした改善のための方策を示すのが良いのではないかと。

取組のポイントと成果

◆取組のポイント

①成果分析の方法

・IB公式ワークショップ受講者に対してアンケート調査を実施、過去のアンケート調査も含めて、検討ワーキングにおいて分析を行った。

②成果共有のポイント

・IB公式ワークショップ等の成果のうち、最初に他の市立学校教員と共有すべきものは何かを検討。

③成果共有の方法

・IB公式ワークショップに参加していない教員や札幌開成中等教育学校以外の教員との成果共有を図る必要がある。

④理解を深めるための方策

・IB公式ワークショップに参加していない教員にもわかりやすく説明する必要がある。

◆取組の成果

◎IB公式ワークショップを非常に肯定的に捉えた教員が、実際の授業の場面ではその成果を取り入れられず、苦慮しているケースが見られた。

◎授業で行われるグループワークに焦点を絞り、現在の「困り」の状況とIB公式ワークショップ等の成果を参考にした改善のための方策を示す。

◎『教室で使えるグループワーク』という冊子を作成し、各市立学校に配付することとした。

◎冊子は、イラスト中心とすることで手にとって見やすくするなどの工夫を行うとともに、IBに関する簡単な説明も加えることとする。

今後の課題

◆冊子の活用方法に関すること

・冊子の配付だけにとどまらず、冊子を活用したワークショップの開催など、その活用方法を検討する必要がある。

◆他の成果の共有に関すること

・グループワーク以外にも、課題の出し方や評価方法など、共有可能な成果があると考えられ、引き続き検討する必要がある。

1. 調査研究の概要

○ 課題認識

教員研修として実施したIB公式ワークショップの研修内容は、そのまま札幌開成中等教育学校以外の学校で取り入れることはできないが、そこから得られた何かしらの成果を、他の市立学校に発信し、共有することはできないか検討する必要がある。

○ 調査研究の目的

札幌開成中等教育学校では、IBの教育プログラムを活用した課題探究的な学習に取り組んでおり、その実践からは、他の市立学校と共有できるものがありそうなことがわかってきた。そこで、IB公式ワークショップの研修内容についても、他の市立学校と共有できるものを選び出すことで、ワークショップの成果を市立学校全体で共有し、全体的な教師力向上を図ることを目的とする。

○ 調査研究の方法

IB公式ワークショップ受講者を対象にアンケート調査を実施するとともに、検討ワーキングのメンバーに札幌開成中等教育学校のIBコーディネーター役を務める教員を加え、札幌開成中等教育学校における授業の状況を分析する。

なお、アンケート調査の結果の抜粋については、教員研修としてのIB公式ワークショップ運営検討ワーキングの活動報告（21～24ページ）で一部を紹介している。

○ 調査研究の対象

IB公式ワークショップと札幌開成中等教育学校におけるIBプログラムを活用した課題探究的な学習を対象とする。

○ 調査研究から見えてきた現状

IB公式ワークショップでは様々なグループワークが用意されていた。また、札幌開成中等教育学校の授業でもグループワークがよく行われていることに着目し、グループワークに焦点を絞り、検討ワーキングでの議論を進めた。また、実際に授業でグループワークを行ってみると、様々な「困り」の場면을敬遠していたことも分かってきた。そこで、グループワークでの「困り」を少しでも改善するための方策を示すことができれば、多くの教員の参考になるのではないかと考え、冊子の形にまとめることができないかと考えた。

なおグループワークは、IBとは関係なく授業の中で行われる学習形態であることから、全ての学校において有効であると考えられる。

2 取組のポイントと成果

本検討ワーキングの成果として、『教室で使えるグループワーク』という冊子を作成することができたが、そこに至るまでには、様々な議論が交わされ、何度も構想を練り直す中で、ようやく実現にこぎ着けたものである。そのため、取組のポイントと成果の要点については、26ページに簡単に示すこととし、ここでは、検討ワーキングにおいてどのような議論が交わされたのかについて、検討ワーキングの記録を参考にしながら報告することとする。

3. 『教室で使えるグループワーク』という冊子ができるまで

(1) はじめに

教員研修として実施した国際バカロレア機構（IBO）が主催するIB公式ワークショップでの研修内容は、必ずしも各市立学校の授業にそのまま活用できるとは限らないというのが、札幌開成中等教育学校以外の市立学校から参加した受講者の声であった。また、札幌開成中等教育学校の国際バカロレア（IB）の教育プログラムを活用した課題探究的な学習についても、そのまま他の市立中学校や高校に取り入れられるものではなく、札幌開成中等教育学校独自の教育プログラムと考えられる。

一方で、実際にIB公式ワークショップに触れてみると、グループワークが頻繁に取り入れられていた。また、このグループワークを行う際に求められる教員の役割は、教授者というよりはグループワークに適切に介入し議論を促進させるファシリテーターとしての役割であることも分かった。

これからの子どもたちに求められる力を育成するという観点に立つと、授業においてグループワークを取り入れる機会は、今後ますます増えていくと思われるが、このことは、とりわけ高等学校においては非常に大きな課題となることが予想される。現実には、まだまだ大学受験のための知識獲得を重視する風潮が強く、そもそもグループワークを取り入れること自体が難しいとも考えられるが、仮に、グループワークを取り入れることを試みたとして、授業をする教員の側にも、授業を受ける高校生側の側にも、授業におけるグループワークの経験が多くない中で、そもそもグループワークの意義が見出せないとか、やってみたもののうまくいかないという状況に直面することが懸念される。

とはいえ、冊子の「はじめに」で記したとおり、私たちが集団の中で生きていくうえでグループワークが必要不可欠であるとの立場に立つと、学校教育の段階から様々なグループワークをする中でより豊かな学びを経験すべきであろう。実際のところ、社会ではグループワークで仕事を進めることが多く、これまでの日本の教育の現場と社会の現場との間には乖離があるのではないかとの指摘もあり、授業でのグループワークの占める役割は、今まで以上に大きなものになっていくものと思われる。

そこで、IB公式ワークショップや札幌開成中等教育学校におけるIBの教育プログラムを活用した課題探究的な学習の成果を他の市立学校に発信し共有するための第一歩として、グループワークを取り上げることとし、実際に札幌開成中等教育学校の授業の中でグループワークを行う際に直面した「困り」の場面を「ありがちなケース」として8ケース取り上げ、教員が適切に介入し議論を促進すること（冊子では「チェンジ!!」と表現）で、「困り」の状況をより良い方向へと導く（冊子では「グッドジョブ!!」と表現）過程を、イラストを中心に象徴的に示す冊子を作成することとした。

冊子の完成に至るまでには、冊子で紹介したのと同じような流れの中で数多くのグループワークが重ねられ、その中で、八つのありがちなケースを何度も選び直し、順番を入れ替え、構図を組み直し、イラストを描き直し、セリフや説明文の書き換えを行った。

まだ冊子を読んでいない方は、まずは何の先入観も持たずに冊子を読んでほしいのだが、本稿では、すべての検討ワーキングに立ち会った事務局職員の視点から、備忘録的に冊子作成の舞台裏を振り返ってみることとした。

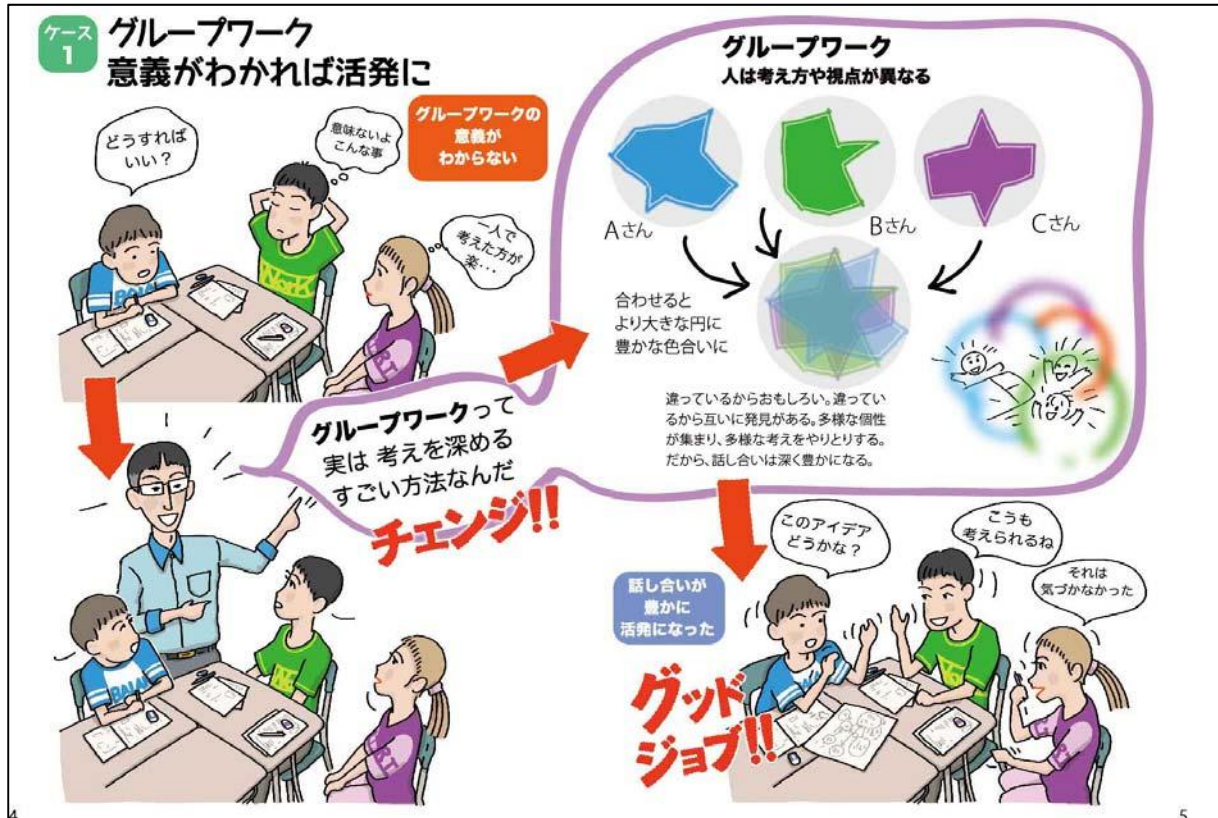
(2) ケース1 グループワーク意義がわかれば活発に

冊子の「はじめに」においてもグループワークの意義を説いているが、実際に授業の中でグループワークをしてみると、いわゆるマイナスの空気のようなものが教室を支配する場面があることを多くの教員が経験する。その要因は様々であろうが、冊子では「どうすればいい?」「意味ないよこんな事」「一人で考えた方が楽・・・」という子どもたちのセリフがこうした雰囲気を象徴的に伝えている。経験した人であればなんとなくその場の空気に共感してもらえないのではないかな。

IBの教育プログラムやIB公式ワークショップに直に触れてみると、多様性というものをとても大切にしていることを実感できる。「人は考え方や視点が異なる」といった多様性のおかげで話し合いは豊かで活発なものになる。そんなメッセージが改めて伝わってきた。

この冊子も一人で完成させることはできなかつたらしく、検討ワーキングに教員しかいなかったとしたらこのような冊子にはならなかつたと思われる。考え方や視点の異なる人たちが集まり、お互いの違いを認め合う中でグループワークを繰り返したからこそ、このような冊子が完成したのではないかな。

つまりケース1で伝えたいことは、グループワークはとても意義のあることだということを理解した上で授業に臨んでほしいということ。このことを「グループワークって実は考えを深めるすごい方法なんだ」という教員のセリフとセリフに連続する説明図で示している。



(3) ケース2 アクティビティやって始まる話し合い

グループワークの意義さえ分かっているならば、グループワークがうまくいくかと言えば、そう単純なものではない。「人は考え方や視点が異なる」以上、お互いの特性をグループワークのメンバーで共有できなければ、話し合いは豊かで活発なものにはならない。「エっ？私が司会するの？」「ぼくは書くよりアイデア出しが好きなんだ」「あなたは声大きいから司会がいいよ」という子どもたちのセリフは、そうしたありがちなケースを表現している。

IB公式ワークショップのプログラムにIBセミナーというのがあり、教員、保護者、地域住民など多様な人たちが受講した。セミナーの中で講師役であるワークショップリーダーが最初に行ったのが、冊子で紹介している「ヘリウムスティック」というアクティビティである。アクティビティの内容は冊子の説明に譲るとして、お互いによく知らない者どうしであるにもかかわらず、このアクティビティが始まると、あちらこちらから歓声があがり、いつの間にか、リーダーの役割を果たす人、周りに声をかける人、アドバイスをする人などの役割分担が生まれ、それぞれの特性が表に出てくるとともに、一気にグループ内の距離感が縮まった。アンケート調査では、このアクティビティを最も印象に残ったこととして記した受講者も多かった。アクティビティ終了後の雰囲気は、「楽しい雰囲気で話が動き出した」という表現がピッタリであった。

なお、IB公式ワークショップでは、新たなアクティビティに取り組む毎に司会役を替えたりグループの構成を替えたりしていた。ワークショップリーダーはその理由を語ることはなかったが、互いの特性を知ることとグループワーク内での役割を固定化することとは直結しないと感じた。



(4) ケース3 インクワイアリーで？^{はてな}集まり論点明確

ある回の検討ワーキングで、特に日本では、きちんと考え方をまとめてからでないと言言しにくい雰囲気があるのではないかという話題が出た。そこから次のようなやりとりが続いた。

下手に発言すると「恥ずかしい思いをする」とか「否定される」とかいうこともあるが、「探究」という日本語のもつ重たい感じも関係しているかもしれない。一般に「探究」に該当する英語は「INQUIRY」であるが、そこには重たい感じは一切ない。もっと気楽にグループワークのメンバーがそれぞれ頭の中に浮かんだ^{はてな}？を出し合い、共有し合えれば、その後に話し合うべきポイントが見えてくるのではないか。

このような検討ワーキングでの話し合いを経て、ケース3が誕生した。「なにか意見はありますか？」という問いかけに対して、「あるけど、ただの質問だしなあ・・・」「話がまとまっていないから・・・」というセリフは、何となく重たい感じの気分を表し、「もっと気楽にINQUIRY!!」という教員のセリフは、難しく考えず、気楽に、どどん^{はてな}？を出すことを促している。実際には、すぐに「グッドジョブ!!」のような場面にはならないかもしれないが、意識してグループワークをしていると、そのうち少しずつできるようになってくるのは、3日間日程で行われるIB公式ワークショップの後半で実際に見られた光景である。



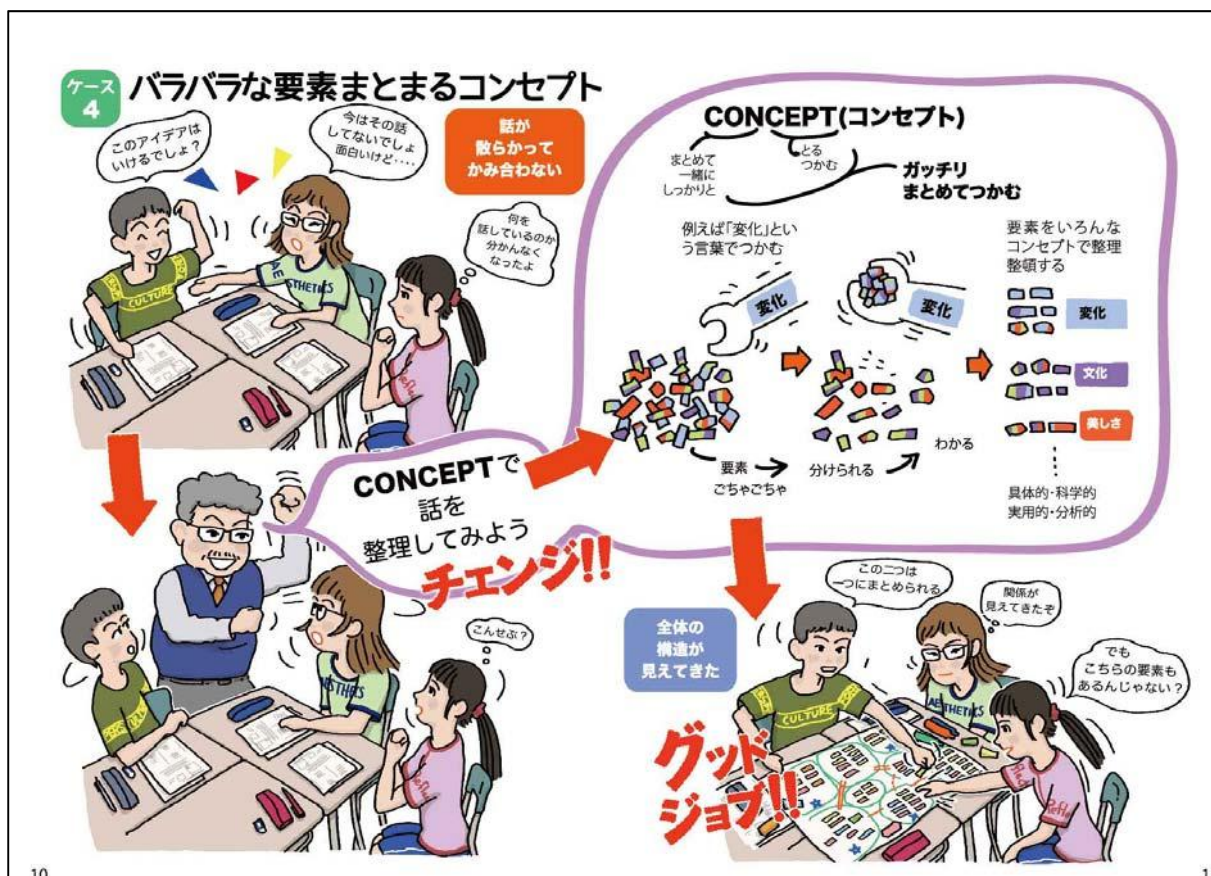
(5) ケース4 バラバラな要素まとまるコンセプト

グループワークで「INQUIRY」ができるようになってくると、話し合いは拡散の方向に展開し、多様な視点から様々な意見などの^{はてな}がグループの目の前に集まってくる。ここから、いよいよ全体の構造を共有し論点をまとめる方向へと進むことになるが、このとき、IBの教育プログラムでもよく出てくる「CONCEPT」が、効果的な道具となるのではないかとの考えから、ケース4が誕生した。

「このアイデアはいけるでしょ?」「今はその話していないでしょ面白いけど・・・」
「何をしているのか分かんなくなっちゃったよ」という子どもたちのセリフは、話が散らかってまとまらない、ありがちな状況を表現している。それに対して、「CONCEPT」という道具を用いて拡散した話を整理していこうと教員は促している。

この「CONCEPT」は、IBの教育プログラムではとても重要であるとされており、冊子の説明に出てくる「変化」「文化」「美しさ」などは、すべてIBプログラムの中で用いられる「KEY CONCEPT」と呼ばれるものである。但し、今回の冊子は、IBのいう「CONCEPT」の理解が目的ではなく、「CONCEPT」という道具を用いて話し合いを整理していくと、全体の構造が見えてくるのではないかということを理解してもらうことを目指している。

ちなみに、今振り返ってみると、今回の冊子作成に当っては、「分かりやすさ」「何かを否定することでチェンジを迫るものではない」「IBに頼らずに説明する」などの「CONCEPT」で全体像を構造化したような気がする。また、冊子では特に触れられていないが、「CONCEPT」を「概念」と訳すと、探究と「INQUIRY」のときのような異なるニュアンスが出てくると考え、冊子では「概念」という言葉を一切用いていない。

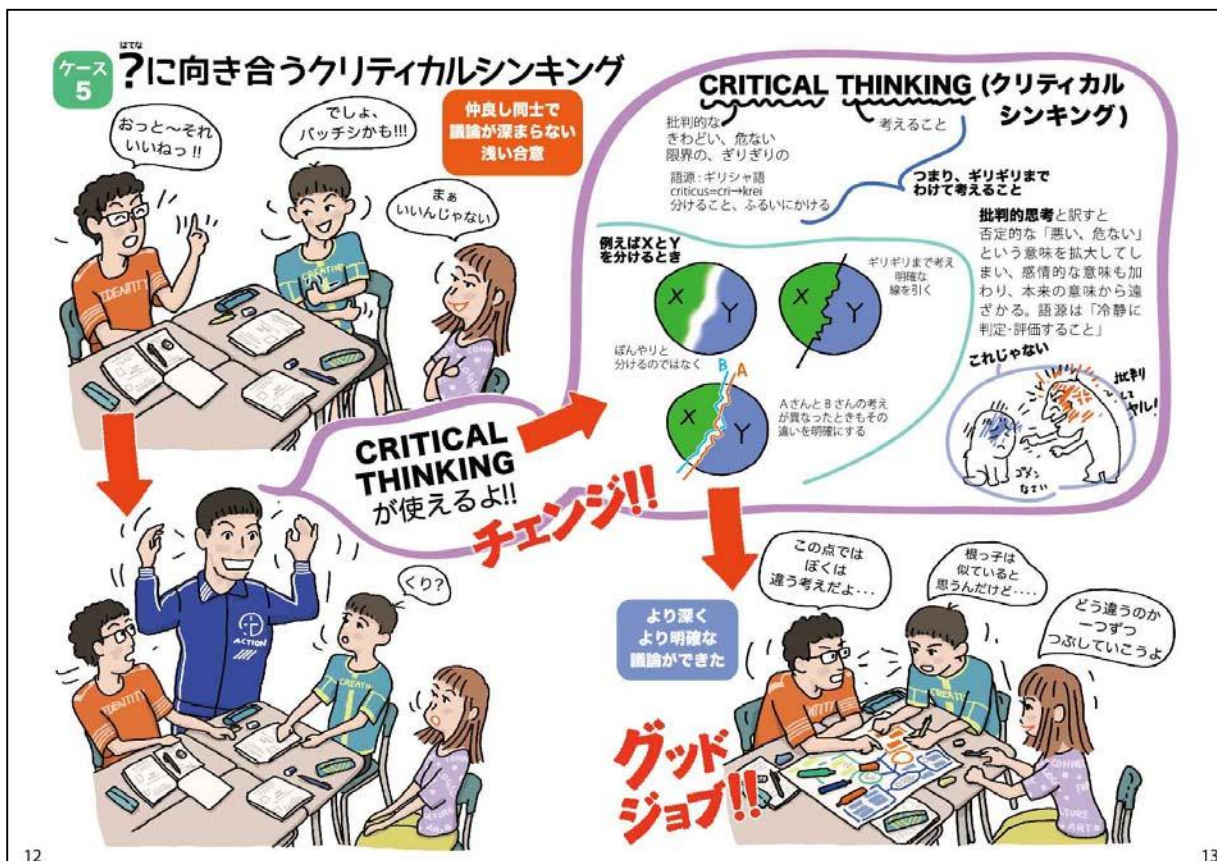


(6) **ケース5** ^{はてな} ?に向き合うクリティカルシンキング

「おっと～それいいねっ!!」「でしょ、バッチシかも!!!」「まあいいんじゃない」。これらの子どもたちのセリフを見ると、何の問題もない状況に見えるが、グループワークでこれが議論の深まらない大きな要因となることがある。グループワークについて「時間が経てば誰かが結論を導き出してくれるからとてもラクチンな学習だ」と話していた生徒がいたようであるが、このような慣れ合いとも思える話し合いでは議論は深まらず浅い合意にしかならない。

IBでもよく出てくる「CRITICAL THINKING」という言葉には、例えばXとYに分けるときに、あいまいにぼんやりと分けるのではなく、考え抜いて境界線ギリギリまで明確に線を引くという意味があると検討ワーキングでは考えた。つまり、「CRITICAL THINKING」という道具を用いることで、異なる複数の考え方が出てきたときなどに、議論をあいまいなまま収束させるのではなく、グループワークの話し合いによってギリギリまで考え抜いて違いを明確にすることで、論点を明確にできる可能性をケース5は示している。

ただし、冊子でも説明しているように、この「CRITICAL THINKING」を「批判的思考」と捉えてしまうと、そこに「批判」というニュアンスが出てきて、異なる考え方をやっつけるなどの感情的な意味合いが出てきかねないことから、あえてこのことに触れている。おかしな「CRITICAL THINKING」によって説明内のイラストのような状況にならないためにも、「CRITICAL THINKING」の意味するところを説明することにかかなりの時間を費やした。



(7) ケース6 過去を見て未来を開くリフレクション

ケース5でも触れたが、グループワークをしていると、時として感情的な議論になったり声の大きな人の意見が全体を支配したりすることがある。このときに有効なのが「REFLECTION」という道具である。

「なに？おれの言い方が悪い？」「きつい言い方だね・・・ホントに・・・」「言い方じゃなくて内容!!!!!!」。これらのセリフは子どもたちのグループワークで見られがちなケースであるが、大人のグループワークの場合は、より深刻な方向へと進んでしまうこともある。議論そっちのけで罵り合いなんてことにもなりかねない。「REFLECTION」もIBがとても重要視しているもので、その言葉のもつ意味を確認してみると、これまでに起きたことを、過去の風景を見るように、客観的、科学的に淡々と冷静に振り返ることのようである。つまり、グループワークが感情的になるなどして議論がとまってしまったときには、冷静に振り返り、その現象が生じ始めた地点にまで戻ってみることが大事であり、そうすれば、本来の話の筋が見えてくるということを示すために「ちょっと待ったここはREFLECTIONでしょ!!」という教員のセリフを用いている。

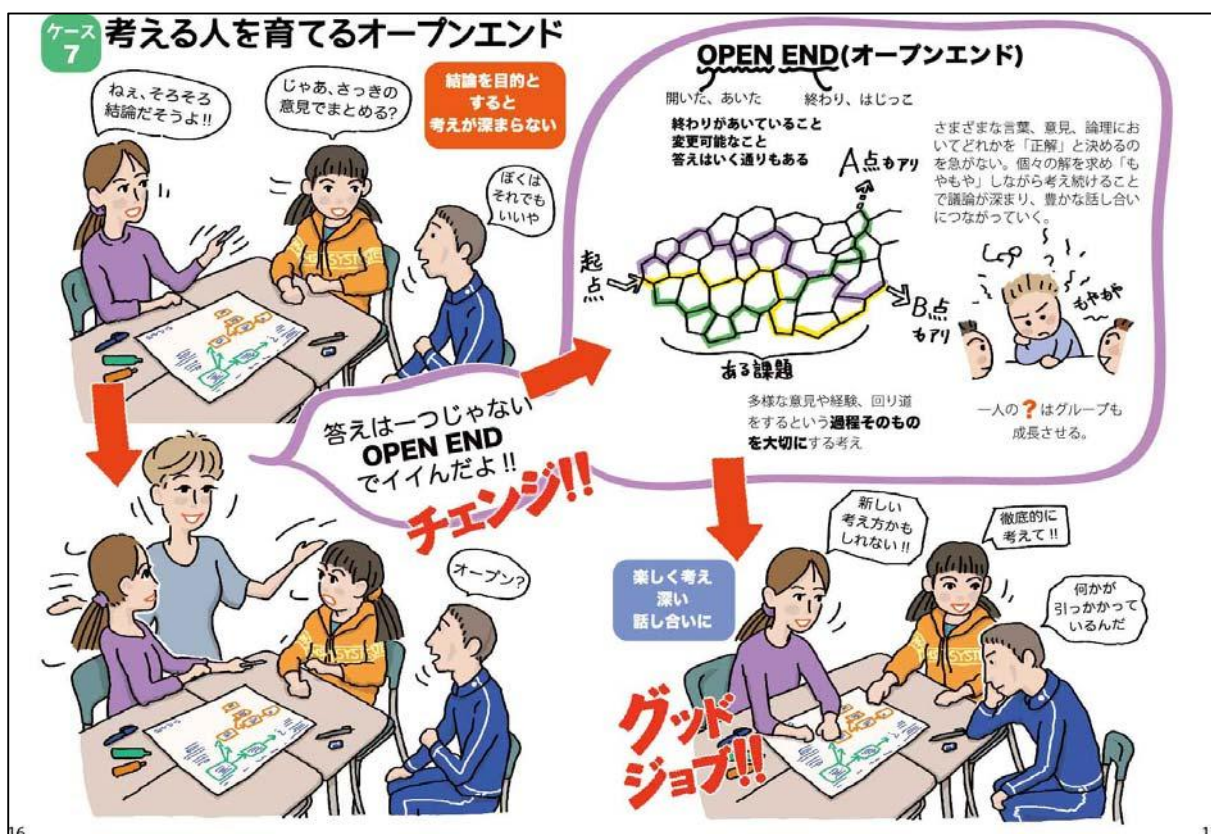
なお、「REFLECTION」にも訳語の落とし穴があり、一般に訳される「振り返り」という言葉のもつ「反省」という感情的なニュアンスが出てしまうと、淡々と冷静に振り返る「REFLECTION」にならない。説明内のイラストにも描いたが、注意が必要である。

(8) ケース7 考える人を育てるオープンエンド

さて、グループワークの議論も後半になると、そろそろ結論を出そうと考えるのはもったいなことである。IB公式ワークショップでは、このもったいな状況が起こらないまま次のグループワークに移ってしまい、受講者に大きな戸惑いを与えた。示された課題に対してグループワークで話し合いをして、グループ内での結論を出して、それぞれのグループが結論を発表し合ったあとに、当然に期待される正解を講師役のワークショップリーダーは示さず、それぞれの結論にそれぞれの正しさがあるかのようなアドバイスをして終わりというような状況がよく見られた。

検討ワーキングでは、かなり時間をかけてこの問題について話し合った。なぜ、ワークショップリーダーは正解を示さないのか。なぜ、私たちは正解を知らされないと「もやもや」するのか。こうした話し合いの中から見えてきたのは、このように「もやもや」しているからこそ考えることをやめずに考え続けるのではないかという気付きである。安易な正解の提示は思考を停止させるのみならず、場合によっては、グループワークで話し合ってきた過程そのものを否定することにもなりかねない。そもそも正解があるかどうか分からないのに、ひたすら正解が示されるのを待つのでは、グループワークの意義を分かっていないのと同じではないか。こうした話し合いの結果、ケース7が誕生した。

「ねえ、そろそろ結論だそうよ!!」「じゃあ、さっきの意見でまとめる?」「ぼくはそれでもいいや」という子どもたちのセリフは、よくある状況のように見えるが、「答えはひとつじゃないOPEN ENDでイイんだよ!!」という教員のセリフは、「OPEN END」のままの方が良い場合も多々あるという問題提起をしているとも言える。

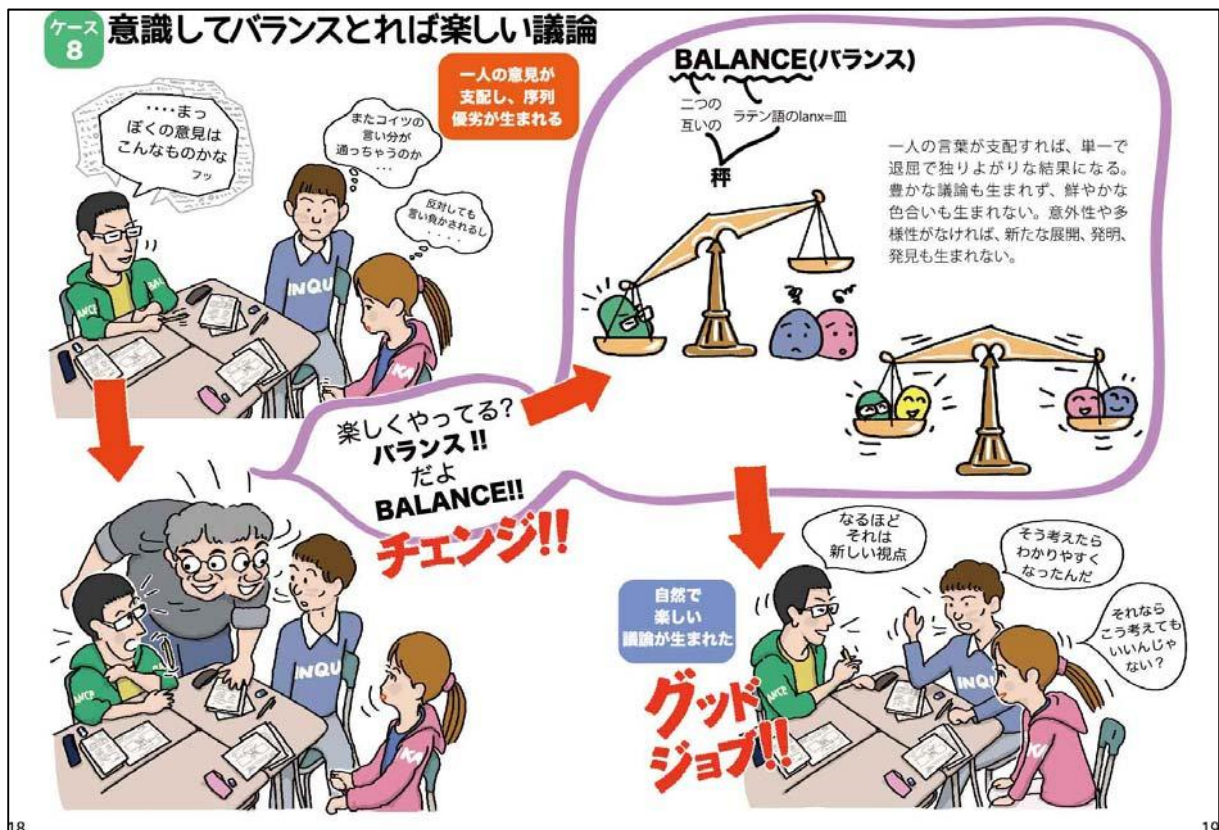


(9) ケース8 意識してバランスとれば楽しい議論

このケースは、今回の冊子で取り上げた八つのありがちなケースの中で、一番まとめるのに苦慮したものである。何度もあきらめかけたが、この「BALANCE」に触れなければ、せっかくのグループワークが楽しいものにならないのではないかという思いは検討ワーキングのメンバー間で強く共有されており、最後の最後まで粘って冊子のような形でまとめることができた。

「……まっ ぼくの見解はこんなものかなフツ」「またコイツの言い分が通っちゃうのか……」「反対しても言い負かされるし……」という子どもたちのセリフは、楽しい人と楽しくない人が混在するいびつなグループワークの状況を表現している。よく考えてみると、このような状況が生じるのは、グループワークの意義が分かっているようでいて、実はケース1で紹介した、「人は考え方や視点が異なる」という多様性のもつ可能性を認めていないのではないか。誰かが絶対的に正しいのであれば、グループワークの話し合いは豊かで活発なものにはならず、結論ありきの議論になってしまい、結局はグループワークの意義を分かっていることにはならない。このような考えからすると、ケース1とケース8は表裏をなすものと言えるかもしれない。

グループワークの参加者には、自然で楽しい議論となるように、みんなでグループワークを作り上げていく意識が求められる。その際、「BALANCE」という道具を意識していると、グループワークが楽しくないときには、もしかしたら「BALANCE」が欠けているのではないかと気付くことができるかもしれない。「楽しくやってる？ バランス!! だよ BALANCE!!」という教員のセリフは、そのことを表現している。



(10) おわりに

今回の冊子を読み進め、八つのありがちなケースを読み終えた後に次のページを開くと、「グループワークの流れ」というタイトルの模式図のような見開きのページが目の前に現れる。最初にこのページを開いても、何を言いたいのかあまりよく分からないが、八つのありがちなケースを読んだ後にこのページを開くと、何となくこの冊子で言いたいことが分かる。そんなページになることを期待してこのページを作っているようにも見える。だから、このページには、八つのありがちなケースのタイトル以外に、一切文字による説明はない。文字による説明はないが、この模式図を用いて誰かにこの冊子のことを説明しようと思えば説明できる。そのようなページを目指しているように見える。

そして、さらに次のページを開くと、ここで初めて、IBの教育プログラムやIB公式ワークショップの話が登場する。実は、これは意図的にこのような構成にしている。本稿の最初に記したとおり、この冊子はIBの教育プログラムを前提としたものではない。IBの教育プログラムに触れた教員やIB公式ワークショップで受講者が感じたことをヒントにしながらも、どの学校においても、グループワークをしようと思ったときに少しは役に立つ冊子であることを目指している。だから、すべてのありがちなケースを紹介し終えるまでは、IBのことについて一切触れないことにした。この考え方で説明することができないのであれば、成果を共有するという試みは失敗である。この冊子を制作した検討ワーキングのメンバーはそんな思いでいたのではないかと想像する。

但し、IBの教育プログラムやIB公式ワークショップというものに会うことがなければ、この冊子が完成することは間違いなくなかったと言える。実際には大きな影響を受けている。だから、最後にそのことをしっかり書くことにした。また、この見開きのページだけ、他のページに比べると、文字の量がとても多い。というよりも、文字しかない。この冊子の中では異色のページであるとも言える。しかし、このページまで冊子を読み進めてくれた人であれば、このページも読んでくれるだろうという期待を込め、途中で読み進めるのをやめてしまわずに、このページまで読み進めてもらえるようなものをつくらうという意気込みで、検討ワーキングでのグループワークが行われたと感じている。

4. 今後の課題

(1) 冊子の活用方法に関すること

今年度は冊子を作成し、札幌市立学校などに配付することとしたが、今後は冊子の配付だけにとどまらず、冊子を活用したグループワーク形式のワークショップの開催など、冊子の活用方法を具体的に検討する必要がある。

(2) 他の成果の共有に関すること

今年度の調査研究では手を付けることができなかったが、具体例を用いたグループワークの説明や、課題の出し方、評価の方法など、他の市立学校と共有可能な成果は他にもあると考えられるため、次年度以降も引き続き検討することが必要である。

5 検討ワーキングメンバーと活動記録

○ 検討ワーキングメンバー（敬称略）

相沢克明（外部の専門人材活用推進委員会副委員長、札幌開成中等教育学校校長）

栗田正樹（支援員、札幌開成中等教育学校相談支援パートナー）

飯野修一（DPコーディネーター、札幌開成中等教育学校教諭）

西村里史（MYPコーディネーター、札幌開成中等教育学校教諭）

広川雅之（外部の専門人材活用推進委員会事務局、札幌市教育委員会）

○ 活動記録

第1回 平成28年6月22日（水）

第2回 平成28年7月6日（水）

第3回 平成28年7月21日（木）

第4回 平成28年8月17日（水）

第5回 平成28年9月14日（水）

第6回 平成28年10月6日（木）

第7回 平成28年10月27日（木）

第8回 平成28年11月18日（金）

冊子作成（平成28年11月～平成29年2月）

Ⅱ 調査研究ワーキングの活動報告

4 特色ある取組の共有検討ワーキング

調査研究の概要

◆課題認識

- ・外部の専門人材を活用した特色ある取組を将来的に市立高校全体で共有するためには、教員に過度の負担をかけない情報発信の仕組みが必要。
- ・外部の専門人材との連携にはノウハウが必要であるが、そのノウハウが次の担当者に引き継がれていない現状がある。

◆調査研究の目的

- ・外部の専門人材を活用した特色ある取組成果やそのノウハウを効果的に情報共有するための方策について検討すること。

◆調査研究の方法

- ・外部の専門人材と連携した取組をいくつか選んで、実際の取組を通して検討すること。

◆調査研究の対象

- ・大通高校ラウンドテーブルの取組
- ・アニマドーレプロジェクトの取組
- ・大通高校における学社融合講座の取組

◆調査研究から見えてきた現状

- ・取組を直接担当している教員は、取組成果やノウハウを情報共有する余裕がない。
- ・こうした役割を果たす人材なり組織なりを設けることが必要ではないか。

取組のポイントと成果

◆取組のポイント

- ①大通高校ラウンドテーブルの取組 →
- ・ラウンドテーブルとは、教育に興味を持つ多様な人たちが集い、自身の活動を省察し他者の活動を聞き取る中で、新たな気付きを互いに持ち帰る公開研究会のこと。
 - ・平成28年8月1日～2日に札幌大通高校で実施

- ②アニマドーレプロジェクトの取組 →
- ・アニマドーレプロジェクトとは、生産者と生活者をつなぐ農業教育体験プログラムのこと。
 - ・大通高校（科目名：キャリア探究）と札幌開成中等教育学校（科目名：キャリア・ライフ・デザイン）が共同で実施する科目（1単位）として実施。
 - ・発表会は平成28年12月18日に地下歩行空間で開催

- ③札幌大通高校における学社融合講座の取組 →
- ・札幌市生涯学習センター企画の市民向け講座の一部を札幌大通高校が教育課程に位置付けることで単位認定。

◆取組の成果

- ◎各市立高校の（特に若手）教員が参加することで、お互いの取組や外部人材活用のノウハウを共有する機会となる。

- ◎市立高校全体の取組とするため、IB公式ワークショップ同様、外部支援者の活用による運営とノウハウの蓄積が必要。

- ◎複数校が共同で実施する外部人材を活用した特色ある取組として定着。

- ◎他の市立高校の生徒の参加も考えられるのではないか。

- ◎将来的に、「市立高校教育改革方針」の学校間連携による特色ある科目に位置付けることも可能ではないか。

- ◎新たな連携協定を構築できれば、札幌大通高校以外の生徒の参加も可能ではないか。

- ◎将来的に、「市立高校教育改革方針」の学校間連携による特色ある科目に位置付けることも可能ではないか。

今後の課題

◆学校間連携・授業推進に関すること

- ・複数の学校が連携し合同で開講する科目の運営方法等についての具体的な検討が必要。

◆学習成果を発表する機会の設定に関すること

- ・アニマドーレプロジェクトの発表会のように、生徒自身が成果を発表する機会の設定に向けて、具体的な検討が必要。

1 調査研究の概要

○ 課題認識

大通高校のラウンドテーブルやアニマドーレプロジェクト、学社融合講座など、外部の専門人材を活用した特色ある取組を将来的に市立高校全体で共有するためには、担当する教員に過度の負担をかけずに、その成果を情報発信することが必要である。こうした取組を企画する教員は、その運営だけでも大きな負担を抱えており、それに加えて情報発信を行うことは困難である。

特色ある取組を行う際の外部の専門人材との連携にはノウハウが必要であるが、そのノウハウをマニュアルなどの形にする余裕は担当する教員になく、必ずしも次の担当者に引き継がれていかない現状がある。そのため、次の担当者が、また一からノウハウの蓄積をし直さなければならない場合もあり、教員の負担に拍車をかけることにもなりかねない現状がある。

○ 調査研究の目的

外部の専門人材を活用した特色ある取組の成果やそのノウハウを、誰もが活用できるよう効果的に情報共有するための方策について検討すること。

○ 調査研究の方法

札幌大通高校ラウンドテーブル、アニマドーレプロジェクト、学社融合講座という三つの外部の専門人材と連携した特色ある取組を通して検討すること。

○ 調査研究の対象

- ・札幌大通高校ラウンドテーブルの取組
- ・アニマドーレプロジェクトの取組
- ・札幌大通高校における学社融合講座の取組

○ 調査研究から見えてきた現状

今回対象とした特色ある取組は、いずれも外部人材の活用が教育の質の向上の観点から有効であることを示すものと言える。その一方で、直接担当している教員だけで取組成果を発信したり、連携のノウハウを共有したりすることは困難であることも確認できた。そのため、市立高校コンシェルジュなどが、こうした役割を果たしていくことも必要ではないかと思われる。

2 取組のポイントと成果

(1) 大通高校ラウンドテーブルの取組

○ ラウンドテーブルとは

広く教育に関わることに興味を持つ多様な人たちが集い、自身の活動を省察し、同時に他者の活動を注意深く聞き取る交流の中で、これからの自分の教育活動に資するような認識を互いに持ち帰る、教育に関するジャンルレスの公開研究会のことをラウンドテーブルと呼んでおり、このラウンドテーブルでは、参加者が自身のそれまでの経験や現在の思いを交流し合い、校種や職業、立場の違いを乗り越えた気づきや学びを、互いに提供し合い、もらい合っている。

○ 平成 28 年度の開催

平成 28 年 8 月 1 日～2 日に札幌大通高校を会場として実施された。

○ 札幌でのラウンドテーブル開催の経緯とその趣旨

もともとラウンドテーブルは、福井大学教職大学院が2000年から年2回ずつ開催し続けている「実践し省察するコミュニティ・実践研究福井ラウンドテーブル」のことを指し、これに参加した札幌大通高校の教員たちが、この形態の学びであれば様々な研究へとつながるという可能性を感じ、平成27年度に札幌で初めて開催を試みたものである。この「2015 札幌ラウンドテーブル」での交流協議の到達点は、日常的な教育実践を教科指導に限定せず、部活動、ホームルーム、総合的学習の時間、校外活動、図書室の取組、困難を抱えた生徒への支援、生徒会活動、地域や大学との連携など、様々な学習活動を利用した、意図を持った生徒への働きかけ全てを教育実践と捉えるべきであるという認識を持ったことである。

また、福井大学で行われた高校生と大学生のクロスセッションに参加した札幌市立高校の生徒も、この交流を広げたいと考え、「札幌市立高校3校合同ラウンドテーブル」を開催し、高校生と大人たちの学びの場を創出した。

今回の調査研究の対象とした札幌での2年目の開催となるラウンドテーブルでは、全ての教育実践を組織化し、生徒の人生構築に寄与しうるものを追究する点に教師の専門性があることを受け、実践の行方を遠くまで鳥瞰し、今後の教育現場の進む方向性について深く省察を加えて各人の糧にすることをねらいとした。

○ 取組の成果

今回は札幌大通高校の教員研修としての開催であり、札幌大通高校の教員のみでの参加であったが、ラウンドテーブルの効果を見ると、今後は、例えば各市立高校の特に若手の教員が参加することで、お互いの学校の取組やその際の外部人材活用のノウハウを共有する機会になるのではないかと考えられる。なお、ラウンドテーブルを市立高校全体の取組とするためには、IB 公式ワークショップ同様、外部支援員の活用による運営とノウハウの蓄積などの工夫が必要であると考えられる。

(2) アニマドーレプロジェクトの取組

○ アニマドーレプロジェクトとは

札幌大通高校と札幌開成中等教育学校がそれぞれの学校の教育課程に位置付けた上で、両校が共同で実施する科目として行う、生産者と生活者をつなぐ農業教育体験プログラムのことである。参加生徒は、次の四つのコースに分かれ、約半年に渡る取組を行った。

- ・ファームインコース：農業体験を通して生産者の苦勞と喜びを知るなど
- ・販売体験コース：農業をビジネスとして捉え、どう売るかを学ぶなど
- ・商品開発体験コース：商品開発に必要な発想力や着想力を身に付けるなど
- ・広報PR体験コース：取材・撮影から紙面の記事作成や動画作りまでを通じて、伝える、表現することの楽しさを知るなど

その発表会は平成28年12月18日に地下鉄さっぽろ駅と大通駅との間に設けられた地下歩行空間で開催された。



△アニマドーレプロジェクトメンバー（恵庭市余湖農園にて）



△ファームインコース



△販売体験コース



△広報・PR 体験コース



△商品開発体験コース

○ 取組の成果

アニマドーレプロジェクトは、札幌大通高校と札幌開成中等教育学校が共同で実施する外部人材を活用した特色ある取組として定着した。ただし、今後も継続していくためには、解決しなければならない課題も見えてきたため、来年度はもう1回今年度と同じ枠組みで実施し、改善を図っていききたい。将来的には、他の市立高校の生徒の参加も視野に入れており、将来的には「市立高校教育改革方針」の学校間連携による特色ある科目に位置付けて実施する可能性もあるのではないか。

～1泊2日の本気の農業体験～ ファームインコース

本コースの概要、ねらい

- ・農業体験を通して、生産者の苦勞と喜びを知る
- ・農業の大変さとかっこよさを知る。
- ・出荷までの全工程を体験することで農業を理解する。



【参加人数】:10名
(開成中等4名、大通6名)

【会場】:恵庭市:余湖農園
<http://www8.ocn.ne.jp/~global/>



活動内容

7月30日(1日目)	農作業体験 & 野菜収穫(余湖農園)
Aグループ 10:00～18:00	カブ・大根の洗浄
Bグループ 10:00～18:00	トマト・ワサビの雑草取り
Cグループ 10:00～18:00	ニンニク分け
Dグループ 10:00～18:00	調理担当 ・献立作成 ・野菜の収穫 ・調理



7月31日(2日目)	農作業体験 & 野菜収穫 & パッケージング体験
全員 6:30～7:30	早朝の雑草取り
A～Dグループ 8:30～15:00	前日と同様の作業 +セロリの苗植え、カブの収穫、パッケージングなど
全員 15:00～16:30	生産者と生徒との振り返り

～自分の言葉で伝え、売る～

販売体験コース

本コースの概要、ねらい

- ・消費者を体験し、食選力を養う
- ・消費者心理を考え、自分の言葉でどう伝えるかを学ぶ
- ・農業をビジネスとして捉え、どう売るかを学ぶ



【参加人数】:4名
(開成中等3名、大通1名)

【会場】:つどーむ、コープさっぽろあいの里店

活動内容

8月2日(10:00～15:00)	体験を通じて消費者心理を体験 (コープさっぽろあいの里店)
1、販売体験①	・まずは実践販売
2、リフレクション①	・基本挨拶、心構え、マナーなど (トレーナーからの指導)
3、販売体験②	・反省を生かして…
4、リフレクション②	・相互評価、数値目標設定
5、販売体験③	・目標達成に向けての最後の販売
6、リフレクション③	・次回販売に向けての準備



8月27日(10:00～15:00)	前回の経験を生かし、再度販売体験 (つどーむ:食べるたいせつフェスティバル)
1、余湖農園ブース 販売体験	・余湖農園の野菜を販売 ・試食提供、レジ管理など
2、リフレクション	・スタッフからの評価など



～オリジナルの調味料をつくろう～ 商品開発体験コース

本コースの概要、ねらい

- ・商品開発における必要事項を理解する
- ・製造業と生産者・流通業者との結びつきを知る
- ・新しいモノを生み出すことの喜びを知る
- ・商品開発に必要な発想力や着想力を身に付ける



【参加人数】:8名
(開成中等6名 大通2名)

【会場】:コープさっぽろ本部、福山醸造所
開成中等教育学校、大通高校

コースの特長

市場調査から商品コンセプト設計、中身・パッケージの組立て、提案資料の作成、バイヤー提案までの一連を体験できる。

活動内容



7月27日(4h)	開発商品の設計作業(コープさっぽろ西宮の沢店)
1. 新商品開発基礎知識	・加工食品とは何か? ・新商品開発に必要な項目は?
2. 市場調査	・コープさっぽろ店舗売り場調査 ・競合品の試食
3. 商品設計	・商品コンセプト設計、味の方向性決め
9月11日(2h)	中身サンプルの試食会、パッケージデザイン設計(余湖農園)
1. 中身の方向性確定	・複数サンプルより方向性を確定
2. パッケージデザイン設計	・容額の選定とラベルデザインのイメージ検討
10月29日(4h)	中身確定・パッケージデザイン方向性確定・プレゼン資料作成(大通高校)
1. 中身の確定	・中身サンプルを試食し、中身を確定する
2. パッケージデザイン決定	・ラベルデザイン案より、デザインを決定
3. バイヤー提案資料作成	・プレゼン資料のつくり方 ・プレゼン資料の作成
11月16日(3h)	コープさっぽろバイヤーへの提案(コープさっぽろ本部)
1. 提案準備	・提案練習 ・試食準備
2. バイヤーへの提案	・商品取扱に向けたバイヤーへの提案
3. 講義/振り返り	・バイヤーの仕事、商談のポイントについて

～デザイナー & 編集者を体験できる～ 広報PR体験コース

本コースの概要、ねらい

- ・アニマドールを通じて、農業や食の大切さを伝える。
- ・取材・撮影から、誌面の記事作成や動画づくりを通じて、「伝える」表現する」ことの楽しさを知る。



【参加人数】:8名
(開成中等5名 大通3名)

【会場】:開成中等教育学校、余湖農園

アニマドールHP



コースの特長

- ・発行部数60万部のコープさっぽろ無料情報誌「ちよこつと」の記事を、プロのデザイナーと一緒につくる
- ・アニマドールのPR動画をiPhoneで撮影し作成する

活動内容



8月3日(3h)	広報・PRの基礎を学び、企画を考える。(開成中等)
1. 広報・PRの基礎(30分)	いいね!農style編集長 伊藤新さんから、広報・PRについて学びます。
2. コンセプトづくり(30分)	何を伝えたいのか、それをどんな風に伝えるか、企画をしていきます。
3. 取材先の決定・準備(30分)	2に基づき、取材先を決定し、取材シートの制作、取材先への連絡をします。
4. ラフ作り(60分)	2,3をもとに手書きでラフ(設計図)を決めます。(過去のちよこつとを参考に)
9月11日(4h)	取材先一部、農業体験中にも撮影を行います。(余湖農園)
1. 取材(120分)	実際に取材先に向き、話を聞きます。撮影もします。(事前に役割分担をします)
2. 取材内容の共有・整理 ラフの調整(120分)	取材内容を全員で共有し、1日で作ったコンセプトに見合う情報量があるか、想定以上に良い取材ができた場合は、更に面白い企画にできないかなどを検討します。
11月5日(7h)	制作(ちよこつと誌面、動画、ウェブサイト記事) (開成中等)
1. 役割分担をして制作	写真のセレクトや原稿書き、デザイン、動画編集など、好きなことや得意なことを活かし、役割を決め、実際の制作を進めます。講師も一緒に制作をサポートします。
2. 発表	その場でみんなで決めたことを反映していき完成!

(3) 大通高校における学社融合講座の取組

○ 学社融合講座とは

札幌市生涯学習センターが企画している市民向け講座の一部を、札幌大通高校と協定を結ぶことによって、札幌大通高校の生徒も受講できるようにしたもので、受講した生徒は単位認定を受けることができる。(実践報告は46ページ参照)

○ 取組の成果

この取組は現在、札幌大通高校のみを対象として実施しているが、札幌市生涯学習センターとの協議により、新たな連携協定を結ぶことができれば、アニマドレープロジェクトと同様に、将来的には、「市立高校教育改革方針」の学校間連携による特色ある科目への位置付けも可能ではないかと考えられる。



△国際協力 貿易ゲーム



△世界国巡り～さまざまな国を知ろう

3 今後の課題

(1) 学校間連携・授業推進に関すること

将来的に複数の学校が連携協定を結ぶなどして、外部人材と連携した特色ある科目を合同で開講する場合の具体的な運営方法等について、引き続き検討する必要がある。

(2) 学習成果を発表する機会の設定に関すること

アニマドレープロジェクトで行われた成果報告会のような取組は、生徒たちが学んだこと、感じたこと、成長したことを、協力してくれた外部人材と共有する貴重な機会であると考えられることから、今後、このような成果を発表する機会の設定に向けて、具体的な検討が必要である。

4 検討ワーキングメンバーと活動記録

○ 検討ワーキングメンバー（敬称略）

西野功泰（外部の専門人材活用推進委員会委員、札幌大通高等学校教諭）

小林英輔（外部の専門人材活用推進委員会事務局、札幌市教育委員会）

広川雅之（外部の専門人材活用推進委員会事務局、札幌市教育委員会）

○ 活動記録

第1回 平成28年7月6日（水）

平成28年8月1日（月）～2日（火） ラウンドテーブル

第2回 平成28年11月26日（木）

平成28年12月18日（日） アニマドレープロジェクト成果報告会

平成28年12月21日（水） 学社融合講座（国際協力 貿易ゲーム）

平成29年1月18日（水） 学社融合講座（世界国巡り）

第3回 平成29年2月9日（木）

第4回 平成29年2月21日（火）

学校設定教科「人間生活」学校設定科目「生活教養」における外部人材活用実践報告

「学社融合講座」として、札幌市生涯学習センター企画の講座を実施している。

前半（10-11月）：「まちなかで触れるアイヌ文化」をテーマに、アイヌ民族の歴史、文化を学ぶ。

後半（12-2月）：「国際交流から多文化共生～国籍を越えたご近所付き合い～」をテーマに身近な共生を考える。

下記日程の中の⑩と⑪の回について、授業の目的内容から、自国と他国の違いを理解しあうことが必要であることから、外部人材の中に外国人や留学生との交流している学生を含めることとした。人選にあたっては札幌市国際プラザの協力を得ながら元プラザ職員の本講座の講師をお願いした。

<講座日程と内容> 以下の表のとおり。

日 程	講 座 内 容
① 10/5	自己紹介、アイヌ文化を学ぶということ
② 10/12	現地学習 札幌とアイヌ文化1（清華亭）
③ 10/19	現地学習 札幌とアイヌ文化2（北大植物園）
④ 10/26	アイヌ民族の歴史①（明治時代以前）
⑤ 11/2	アイヌ民族の歴史②（明治時代以降）
⑥ 11/9	アイヌの衣服（材料・文様など）
⑦ 11/16	現代のアイヌ文化と今後の課題
⑧ 12/7	国際交流を普段着で・・・札幌の国際交流とホームステイ
⑨ 12/14	やさしい日本語でコミュニケーション
⑩ 12/21	国際協力 貿易ゲーム
⑪ 1/18	世界国巡り～さまざまな国を知ろう（多国籍市民）
⑫ 1/25	ワールドカフェⅠ ご近所の多文化
⑬ 2/1	ワールドカフェⅡ 地域で災害、どうしよう？
⑭ 2/8	多文化都市札幌を
⑮ 2/22	ロナルド・マクドナルドを知っていますか？

<外部人材の活用・役割>

⑩ 学生団体「結」のメンバーがファシリテーターの役目を担当、受講者はグループに分かれてそれぞれ日本、アメリカ、ブラジル、ガーナ、エチオピアの国民として自国の産物を貿易によって自国の利益をどのように獲得するかゲームをした。

⑪ 札幌に住んでいる、または学んでいる外国籍（フランスとベトナム）の方を招き、それぞれから国の紹介と日本での生活の仕方を発表してもらった。その後、受講者は2つのグループに分かれそれぞれ質問をし合い、途中で交代して両方の国の方との交流をした。

<その効果>

⑩ 仮想貿易を経験したことで、世界と日本という意識が実感できた。世界の貧困に悩む国々に対して日本ができることは何かということまで考えられるようになったとの感想が聞かれた。グループワークによって、同じ国でも意見の違いがあり、それをまとめようとする力が必要であることも理解できた。

⑪ 札幌での暮らしの状況を外国籍の方と直接聞くことができたり、話すことができたりしたことで、互いの距離が縮まり、普段着で接することが大切であり、易しい日本語で話すことの大切さも感じることができ、共生のヒントが得られた。

II 調査研究ワーキングの活動報告

5 特別免許取得に向けた研修に関する検討ワーキング

調査研究の概要

◆課題認識

・特別免許取得を前提にグローバル人材育成推進員＝GEA（非常勤職員）として任用される外国人教員に対する効果的な研修の仕組みが整っていない。

◆調査研究の目的

・GEAとしての任用期間である10月から3月までの間に実施すべき効果的な研修の仕組みを検討すること。

◆調査研究の方法

・H27年度に特別免許を取得した3名の外国人教員と、現在GEAとして任用されている4名の外国人教員を対象にヒアリング調査を実施

◆調査研究の対象

・27年度特別免許取得者(期限付き常勤講師)3名
・28年度GEA任用者4名

◆ヒアリング調査から見てきた現状

・日本人教員等から定期的に英語で指導・相談を受けられるメンター制度導入が求められる。
・勤務校の他教科の授業や他校種の日本の学校見学を研修の中に組み入れる。
・GEAの職に応募する際のFAQを作成し、応募者に周知する。
・日本での日常生活の基本を記した市役所等発行の資料等を配付して、オリエンテーションの際に周知する。

取組のポイントと成果

◆GEA任用と特別免許取得の流れ

4月～：GEA募集開始（学校）
～6月：予備選考（学校長）
6月末：任用内定（札幌市教育委員会）
7月～：受入れ準備
・ビザ取得サポート（札幌市教育委員会）
・住居確保（学校）
・招聘旅費支給（札幌市教育委員会）
・賠償保険加入（札幌市教育委員会）

9月末：任用予定者来日

オリエンテーション（学校）

10月～：GEAとして任用（札幌市教育委員会）

研修（学校）

12月：特別免許推薦の判断（札幌市教育委員会）
⇒特別免許申請（北海道教育委員会へ）

3月：特別免許検定審査会（北海道教育委員会）
⇒特別免許授与（北海道教育委員会）

4月：期限付き常勤講師へ任用替え
又は
GEA継続

◆ヒアリング調査による改善ポイント

◎応募の際のFAQ作成
（例）書類作成費用の負担者は誰か？
◎学校案内（英語版）の同封
（例）学校のポリシー等の理解
◎外国人向け『さっぽろ 暮らしのガイド』配付・説明
◎メンター制度の導入
・毎週1回程度定期的な面談
・英語で相談できる環境が望ましい
・他校種及び専門外教科の授業見学の組み込み
◎早期にIB公式ワークショップを受講
・英語によるワークショップが望ましい場合も

今後の課題

◆メンター制度を導入する場合の課題の整理

・英語で相談を受けることのできる教員は限られており、新たな負担に配慮する必要あり。
・指導内容以外に、年休取得など管理職が対応すべき案件も含まれる。

◆外国人教員と同等の経歴を有する日本国籍を有する人材の活用について

・現在、海外の高等教育を受けたため日本の教員免許を容易に取得できない日本人に対応できない。

1. 調査研究の概要

○ 課題認識

札幌開成中等教育学校では、国際バカロレア（IB）の教育プログラムを活用した課題探究的な学習を推進している。このため札幌市教育委員会では、特別免許状を取得した外国人教員が単独で英語、数学、理科などの授業を担うことを想定し、平成 27 年度から外国人教員をグローバル人材育成推進員（GEA）として任用し、勤務校での研修を実施した上で、適当と判断した者に対して、北海道教育委員会への特別免許状授与申請を行っている。

これまでに、平成 27 年度 3 名、平成 28 年度 4 名の GEA に対して研修を行ってきたが、効果的な研修の仕組みが整っていない現状がある。

○ 調査研究の目的

本検討ワーキングにおいては、平成 27 年度に GEA として任用され特別免許を取得した 3 名の外国人教員と、平成 28 年度に GEA として任用され、現在研修を受けている 4 名の外国人教員の合計 7 名に対する研修の在り方について分析することにより、外国人教員の実情に合った効果的な研修の仕組みについて検討することを目的とする。

○ 調査研究の方法

過去 10 年にわたって札幌開成高等学校の特別非常勤講師を務め、平成 27 年度に特別免許を取得するとともに、今年度の外部の専門人材活用推進委員会の委員を委嘱しているディクセツ・ラケツシ常勤講師が中心となって、7 名の調査対象者に対して、記名式のヒアリング調査を実施し、検討ワーキングにおいてその内容を分析し、推進委員会に報告した。

○ 調査研究の対象

ヒアリング調査の対象となった 7 名の外国人教員の経歴等は次の通り。

年度	任用者の教科	国籍等	特別免許取得状況	備考
2015 (H27)	英語	イギリス	取得（中・高）	28 年度常勤講師(期限付)
	数学	オーストラリア	取得（中・高）	28 年度常勤講師(期限付)
	理科	イギリス	取得（中・高）	28 年度常勤講師(期限付)
2016 (H28)	英語	イギリス	申請（中・高）	非常勤職員として任用中
	英語	アメリカ	申請（中・高）	非常勤職員として任用中
	美術	シンガポール	申請（中・高）	非常勤職員として任用中
	音楽	香港	申請（中・高）	非常勤職員として任用中

※平成 29 年 1 月のヒアリング調査実施時

○ ヒアリング調査から見てきた現状

来年度以降の研修に向けて、いくつかの具体的な課題が浮かび上がってきたことにより、より効果的な研修の仕組みを整えるための改善ポイントを明らかにすることができた。

2. 取組のポイントと成果

(1) GEA 任用と特別免許取得の流れ

札幌市教育委員会における現在の GEA 任用手続の開始から特別免許取得までの流れは次の通り。

時期	内容	実施主体
前年度 3 月まで	○GEA「資格要件」「要綱」改訂(必要に応じて)	札幌市教育委員会
4 月～	○GEA 募集開始 ・募集要項作成及び募集	学校 (学校長)
～6 月	・予備選考	(学校長)
6 月末	○任用内定	札幌市教育委員会
7 月～	○任用内定者の入国に向けた受入れ準備 ・就労ビザ取得サポート ・住居確保及び備品等の購入 など	(札幌市教育委員会) (学校)
9 月末	○任用予定者来日、オリエンテーション	学校
10 月～	○GEA 任用(身分は非常勤職員) ・研修(～3 月)	札幌市教育委員会 (学校)
12 月	○特別免許推薦の判断	札幌市教育委員会
1 月	○特別免許申請(北海道教育委員会へ)	札幌市教育委員会
3 月	○特別免許検定審査会	北海道教育委員会
3 月末	○特別免許状授与	北海道教育委員会
4 月～	○期限付き常勤講師へ任用替え 又は GEA 継続	札幌市教育委員会

(2) ヒアリング調査から見た改善ポイント

ヒアリング調査の結果を検討ワーキングで分析した結果、いくつかの改善ポイントが浮かび上がった。そのうち、特に、来年度から改善すべきと思われるのは次の 4 点。

第 1 に、募集時や契約時における FAQ の作成と公開についてである。現在、教育委員会が作成した資格要件や要綱、学校長が作成した募集要項により GEA の任用手続を行っているが、GEA の任用は試行錯誤の部分が多く、これらの文書だけでは分からない疑問点などが数多く学校に寄せられた。過去 2 年間の取組からよくある質問の傾向が把握できたはずであり、FAQ を作成すれば応募しようとする人材にとって有益な情報になるのではないかとの意見があった。

第 2 に、ガイド等の配付についてである。ALT と異なり前任者との引き継ぎもなく初めて日本で暮らすことになる GEA もいるため、外国人居住者向けに札幌市が発行している『さっぽろ 暮らしのガイド』をオリエンテーション時に配付して、その要点を説明すると良いのではないかとの意見があった。また、英語版の学校案内を任用内定時やオリエンテーション時に配付しておく、学校のポリシーの理解に役立つとの声もあった。

第 3 に、メンター制度の導入についてである。実際に研修が始まってみると、教材研究や日本文化のことはもちろん、例えば、日本の学校ではどの程度騒がしいときに

生徒を注意するのか、小学校時代にどのような環境の下で学んできた子どもたちが進学しているのかなど、様々な疑問が生じる。こうした疑問を、定期的にメンターとの面談の中で消化できることは、とても重要なことではないかとの意見があった。

第4に、IB 公式ワークショップ受講についてである。現在、特別免許取得前又は取得後の夏季休業中（7～8月）に受講機会が確保されているが、できることなら研修中の受講が望ましいとの声もあった。また、日本語能力が十分ではない GEA もおり、英語でのワークショップ受講を希望する声もあった。

検討ワーキングでは、これらの改善点について、できるだけ前向きに検討すべきであると考えている。

3. 今後の課題

(1) メンター制度を導入する場合の課題の整理

ヒアリング調査では、メンターとの会話は英語が望ましいとされている。また、年休等の取得時期の相談など管理職が対応すべき相談内容も含まれることが想定される。しかしながら、英語の教員や管理職に過度の負担を生じさせないように工夫する必要がある。

市立高校の管理職を経験した英語教員の OB を外部人材としてメンターに招聘するのも一つの方策ではないかとの意見も出たところであり、引き続き検討が必要である。

(2) 外国人教員と同等の経歴を有する日本国籍を有する人材の活用について

ヒアリング調査とは別の話になるが、GEA の応募者の中に、海外の IB 校でディプロマ資格を取得し引き続き高等教育を受けた日本国籍を有する人材からの照会があったが、現在の GEA の制度は外国籍の人材に限定しており応募できないということがあった。

特別免許の制度は国籍による制限を設けていないので、優秀な人材を確保するために、こうした人材も特別免許を取得できるよう制度の改善を図っていく必要がある。

4. 検討ワーキングメンバーと活動記録

○ 検討ワーキングメンバー（敬称略）

ディクセツト・ラケッシ（外部の専門人材活用推進委員、札幌開成中等教育学校常勤講師）

飯野修一（DP コーディネーター、札幌開成中等教育学校教諭）

広川雅之（外部の専門人材活用推進委員会事務局、札幌市教育委員会）

○ 活動記録

プレワーキング 平成28年9月9日（金）

第1回 平成28年11月18日（金）

アンケート形式によるヒアリング調査の実施（平成29年1月）

第2回 平成29年2月3日（金）

Ⅲ 調査研究の成果と課題の分析

○ 外部の専門人材を活用した総合的な教師力向上のための調査研究

調査研究の概要

◆課題認識

- ・学校と外部人材をつなぐ仕組みを構築
- ・外部人材を活用した取組のノウハウの共有と発信
- ・外部人材のための特別免許取得に向けた環境整備

◆調査研究の目的

- ・外部の専門人材を活用することにより、教師力向上を図ること。

◆調査研究の方法

- ・調査研究について協議するため「市立高校外部の専門人材活用推進委員会」を組織
- ・課題ごとに五つの検討ワーキングを設け具体的に検討

◆調査研究の対象

- ・外部人材を実際に活用した取組を通して研究
IB公式ワークショップ（札幌開成中等教育学校）
ラウンドテーブル（札幌大通高校）
アニマドレープロジェクト（開成・大通）
学社融合講座（大通）
特別免許取得に向けた研修（開成）

◆調査研究から見えてきた現状

- ・外部人材を活用した取組は、教師力向上に有効
- ・外部人材を活用する仕組みを構築しないと、教員に過度の負担がかかる懸念がある
- ・外部人材を活用した取組を継続するには、外部人材によるノウハウの蓄積と情報発信が必要

取組のポイントと成果

◆各検討ワーキングのポイント

- ①コンシェルジュ組織の在り方 →
- ・学校と外部人材とをつなぐ組織とコンシェルジュの役割を整理

- ②IB公式ワークショップの運営 →
- ・外部支援員が運営する形でIB公式ワークショップを実施

- ③IB公式ワークショップの成果発信 →
- ・ワークショップの成果としてグループワークという学習形態に着目

- ④特色ある取組の共有 →
- ・外部人材と連携した実際の取組を通して、外部人材と連携する際の課題等の洗い出し

- ⑤特別免許取得に向けた研修の在り方 →
- ・アンケート形式のヒアリングを実施

◆取組の成果

- ◎市立高校コンシェルジュの配置実現
（平成29年度は2名の予定）

- ◎外部支援員による運営のためのマニュアル整備

- ◎『教室で使えるグループワーク』という冊子を作成し、各市立学校に配付

- ◎他の市立高校に取組を広げるためのノウハウ蓄積

- ◎研修の改善ポイントの明確化（メンター制度等）

今後の課題

◆「市立高校教育改革方針」との関係について

- ・本調査研究の成果を「市立高校教育改革方針改革方針」の実施に生かすこと

◆外部人材を活用した取組成果の情報発信について

- ・今年度は、外部サーバー等の活用による成果の情報発信にまでは至らず、条件整備のみ
- ・次年度は市立高校コンシェルジュを活用した情報発信

○ 調査研究のまとめ

本調査研究の成果と課題については51ページの絵に概要を示した。それぞれの詳細な調査研究の内容については、市立高校外部の専門人材活用推進委員会と五つの検討ワーキングの活動報告に詳しく記しているの、そちらを参照していただきたい。

札幌市教育委員会では、今後10年間を見据えた高校教育の在り方を示す「札幌市立高校教育改革方針」を策定した。そのうち今後5年間で取り組む教育改革に係る基本施策等を示した教育改革実行プラン（第1期）には、「学校連携・授業連携の推進」「学習成果を発表する機会の設定」「学校教育相談体制の充実」「学校の広報活動を支援する組織体制の整備、学校と地域・企業等をつなぐ組織体制の整備」が重点項目として示されている。

本調査研究はこの市立高校教育改革方針のために行われたものではないが、本調査研究から得られた知見の多くが、今後の施策推進に際して何らかの形で生かされるのではないかと考えられる。本調査研究では、学校と外部の専門人材とをつなぐ組織の在り方やコンシェルジュの役割について検討を行ってきたが、この検討結果は、市立高校教育改革方針にも示されている「学校の広報活動を支援する組織体制の整備、学校と地域・企業等をつなぐ組織体制の整備」の中の市立高校コンシェルジュの制度化に際して参考とした。また、外部人材を活用した特色ある取組に関する調査研究は、「市立高校教育改革方針」に示されている「学校連携・授業連携の推進」の一つの方向性を示すものと言える。

また、外部人材を活用した取組のノウハウの蓄積に関して、今年度の調査研究では、『教室で使えるグループワーク』という冊子を作成、配付することができた。今年度の調査研究ではWebを活用した成果の共有を目指したが、様々な課題整理に追われ、結局実際の運用にまでは至らなかったが、これに代わる成果の共有ツールとして活用していきたい。IB公式ワークショップの「運営マニュアル」は、ノウハウの継承のための有効なツールとして活用していくとともに、来年度は引き続きラウンドテーブルの「運営マニュアル」を作成していければと考えている。特別免許取得に向けた教員研修についても課題が見えてきたことで、来年度は具体的な改善に取り組んでいきたいと考えている。

学校と外部をつなぐ組織については、コンシェルジュの役割とは別に、外部人材主導による組織の設立も期待されるが、仮にそのような動きが実現する際には、本調査研究で得られた知見を積極的に活用していただきたいと考えている。

本調査研究の結果、新たに取り組まなければならない課題もいくつか見えてきたため、次年度以降も何らかの形で継続していくことが求められる。

本報告書は、文部科学省の初等中等教育振興事業委託費による委託事業として、札幌市教育委員会が実施した平成28年度「総合的な教師力向上のための調査研究事業」の成果を取りまとめたものです。

したがって、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続が必要です。